

会報

第 26 号 (令和 2 年 1 月 9 日発行)

北海道高等学校世界史研究会

事務局 北海道札幌真栄高等学校

〒 004 - 0839

札幌市清田区真栄 236

TEL(011)883 - 0465 / FAX(011)883 - 1302

高世研第 50 回記念大会を終えて

北海道高等学校世界史研究会

会長 橋本達也

(北海道科学大学高等学校長)

新年、明けましておめでとうございます。

会員そして全道の高校で地歴公民科教育に携わっているすべての先生方の益々のご活躍を祈念いたします。

昨年 7 月 27・28 日の両日に渡り、北海学園大学において、第五回高大連携歴史教育研究会札幌大会を日本史教育研究会と共同して開催することができました。高世研にとっては第 50 回大会という節目の年でもあり、全国から参加いただいた方々とともに、大変有意義な時間を過ごすことができました。改めて、関係の皆様我心からお礼申し上げます。

大会では、高大歴研の桃木会長による趣旨説明の後、北大スラブ・ユーラシア研の岩下先生による「ボーダースタディーズからみたヒストリーと歴史教育」と題する講演を頂きました。「歴史とは、人間の暮らす空間が再構成されていく時間の流れである」という言葉は、事実と時間に偏りがちな我々の視線を揺り動かしてくれるものでした。続いてパネルディスカッション①「北海道と沖縄から歴史教育を考える」が行われました。ビザ無し渡航の経験を報告してくれた、根室高校卒の大学生の堂々かつ真摯な姿が印象的でした。また、沖縄の状況を報告いただいた沖縄国際大の藤波先生が釧路湖陵卒の道産子であるという事実も、嬉しいことでした。

2 日目は、パネルディスカッション②「歴史総合・探究科目の実施に向けて」をテーマに、「北海道における実践事例」・「新しい歴史教育と教員養成」・「高大連携から考える大学入学者選抜の改革」という 3 つの分科会に分かれて議論が進みました。どの分科会も興味をそそられる内容で、1 つの分科会しか選択してもらえないことが心残りでした。

どの学校も、新学習指導要領に基づいた新たな教育課程を編成するための議論の真最中だと思います。新しい教科書がどのような作りとなるのか、解説書に記載されていた多数の「問い」が、実際にどのように反映されるのか。期待と不安が入り交じるところです。昨年の高大連携研開催を受け、「歴史総合」や「日本史探究・世界史探究」への取り組みを、日本史・世界史という科目の枠組みを超えて考えるフォーラムを作ろうという動きも出ています。新入試への対応も含め、全道の先生方の情報交換や共同研究に本研究会が少しでも役立つことを願っています。是非とも、仲間に入ってください！

第50回記念大会（兼 高大連携歴史教育研究会第5回大会）記録

日 程：7月27日（土）、7月28日（日）

会 場：北海学園大学 7号館

共 催：北海道高等学校日本史教育研究会

第一日目

テーマ：「ボーダーヒストリーと歴史教育——周辺地域から考える」

全体講演：岩 下 明 裕 氏（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

パネルディスカッション①：「北海道と沖縄から歴史教育を考える」

報告1：本 間 靖 章 氏（北海道札幌北陵高等学校）

小 島 竜 氏（北海道根室高等学校卒業生）

報告2：藤 波 潔 氏（沖縄国際大学）

コメンテーター：近 藤 健一郎 氏（北海道大学）、橋 本 雄 氏（北海道大学）

第二日目

テーマ：「歴史総合・探究科目の実施に向けて——探究型の授業例・歴史総合担当
教員の養成」

パネルディスカッション②-1：『歴史総合』『探究科目』の実際の実施に向けて～ワークショップ
「植民地の記憶をどう授業に活用するか—北海道の事例から」

報告1：吉 嶺 茂 樹 氏（北海道有朋高等学校）

報告2：信 田 麻紀子 氏（市立札幌大通高等学校）

報告3：小 川 正 樹 氏（函館ラ・サール中学・高等学校）

コメンテーター：白木沢 旭 児 氏（北海道大学）

パネルディスカッション②-2：「新しい歴史教育と教員養成」

報告1：赤 間 幸 人 氏（北海道教育庁）

報告2：池 上 大 祐 氏（琉球大学）

報告3：桃 木 至 朗 氏（大阪大学）、猪 原 達 生 氏（大阪大学大学院）

パネルディスカッション②-3：「歴史教育の高大連携から考える大学入学者選抜の改革」

報告1：鈴 木 茂 氏（名古屋外国語大学）

報告2：宮 崎 亮 太 氏（関西大学中・高等部）

五十嵐 学 氏（筑波大学附属高等学校）

コメンテーター：鎮 目 雅 人 氏（早稲田大学）

全体講演

ボーダースタディーズからみたヒストリーと歴史教育

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

岩 下 明 裕

岩下でございます。今日は、お招きいただき、ありがとうございます。

今日来られてるのは、80人ぐらいが北海道の歴史の先生方で、のこり半分ぐらいが、全国から来られたとのことで、北海道の話札幌でやるということなんです。この段階で違和感を持っていただかないといけないんですが、「北海道」って言ったときに、みんな、札幌を覚えてしまうということがあって。札幌に住んでると、私は北海道人になった、と思うわけですが、たぶん、今日札幌以外の地方から来られてる北海道の先生方は、「絶対そんなことはない」と思われると思うのです。

これを思い付いたのが、5月に「北海道の交通を考える」というセミナーで、北海道教育大学の交通学で地理をやってる武田泉先生が「大体、みんな、北海道へ行く＝札幌、と札幌の人間は思っている。札幌の人間が見ている北海道というのは、新千歳空港までで、そこから先は東京につながっているんだ」と。

それから、北海道と言ったときに一番考えなければいけないのは、全国で豊かな地域のトップ10の一つに北海道の村や市が入ってるんです。稚内の隣に猿払村という、全国で4位ぐらいの村があります。ホタテで儲かっているのです。全国で結構上位の地域は多いです。特に海産物や酪農をやっているところが多いです。しかし、「そんなこと言ったら、北海道の平均所得は上位に行くのではないか」ということになりませんが、これはご承知の通り、下位の方で沖縄と争ってるわけです。ということは、ものすごく下のところがあるということです。すごい格差があります。ついでに言うと、沖縄だって大東島などは、ものすごく所得があります。

だから、そういう、「北海道」と括弧の難しさ、特に北海道は移民の地ですから、みんな渡来歴が違うので、コミュニティの在り方が違うわけです。そういうことを考えると、北海道というのは一つで語るのが難しいな、と思うわけです。明日は皆さん、北海道博物館に行き、北海道のヒストリーを見て、「内地と違いますね。弥生時代ありませんね。擦文なんて初めて聞きました」と思う方々も多いと思います。しかし、弥生時代が無いと言われてる北海道なんです、北海道は、本当は一つではない、というようなことを考えるわけです。

つまり、歴史を語るときに、われわれは何を忘れてるかと言う

と、空間を忘れてるのです。日本は歴史教育・研究がとても多くて、今でこそ、例えば私などは国際関係論と国際政治論をやっていますが、以前は基本的に歴史をやってる人ばかりでした。私は九州大学にいたときの国際関係論の先生は高田和夫先生でしたが、この人は和田春樹先生の最初の弟子で、ロシア史の先生でした。ロシア史の先生が国際関係論について、米露の核戦略とかをやるわけです。僕もその頃学生ですから、誰が何をやってるか知りませんから。私も実は、最初にやったのはロシア革命とかソ連史で、そういう影響を受けました。今は全くやっていません。けれど、むしろ歴史を感じて、歴史をやりますと、本質が分からないということですよ。

ロシア革命の研究でも何でもそうですが、大体因果関係で見ていきます。昭和何年には、こういう事件があって、血の日曜日があって、それで第1次世界大戦があって、こうなって、みないな。そうやって革命が起こったんですけども、違う可能性もあったんです。「ペテルブルグの話だけじゃないか」ということなんです。モスクワだって、その頃は、あまり出て来ません。ロシア帝国って広いわけです。ほとんど他の地域の話が落ちている。

一つの歴史の説明で、要するに権力史観で見ていくと、こぼれ落ちるものがあります。一時期流行ったマルクス主義。「だから民衆史なんだ」というような反権力史観。でも、民衆って一体誰なのか、よくわからないですね。そしたら「空間だ、地域史だ」とやるわけです。

地域史って、とても良いのですが、地域はどうやって設定するのか、という問題があります。「ロシア極東といっても広いし、シベリアって全く違う」というような。そうすると、どんどん「何々地方の何々村」とかになってしまいます。日本史研究などもそうやって細々となって、全体が分からないんです。その村であったことが、いったい全体にどう関係するんでしょうか。それで縦軸で考えていったときに、空間を考え出すと、何を軸にとるのかわからなくなり、結局困るということがよくあります。

そこで考えたら、歴史は大事なんですけど、歴史の研究や教育をしている人って、ある人に言われたのですが、「歴史学というのは、年表で考える」と。ああ、なるほど、と思いました。「で、君は地理学者？」と言うので、「いや、私は地理学なんか勉強してないですよ」「君は、先に地図を書くだろう」と言うのです。最近、私は論文を書くときに、年表など考えません。地図を見て、地球儀を見て、じっと考える。それで、その空間を見て考える。それを聞いて、確かに最近私は、最初に地図を見ると思い、最近、政治地理学者とか地理学者のふりをしています。

それで、地理学、特に政治地理学が、戦後壊滅的な状況になったのは、軍事的な近接性があるということで忌避された。

そして、地理学と全く違う、都市計画などの政治と遠い部分を持っていってしまう。そういうことがあって、本来、国や権力といったものについて、歴史も含めて考えるときの空間というものをきっちり考えるということが、特に日本ではできないということがあります。

さて、地球を見ると、当たり前ですが、国境なんか無いんですね。しかし実際には、国境線が引かれてる。いわゆる国境が引かれた地図というのは、ポリティカル・マップと呼ばれています。だから、自然のマップとは違うということです。逆に言うと、いろいろな国が生まれて、いろいろな国境線ができて、それが変わっていったってことです。

だから、ここから言われることは、国境というのは変わるものであるということ、同じ国境が続くことはないということ、国境は消えたり、無くなったりするのではなくて、また生まれるということなんです。

ボーダースタディーズをやってますと、国境の話をする人が多いのですが、国境ってというのはボーダー、境界、いろいろありますが、その中で最も政治的な、権力的な空間があるということです。だから、国境の話をするときに、もめたら、それは領土問題になります。そういうことをやっていると、「いや、岩下先生、古いですね。そんな国境とかにこだわって、19世紀の人ですか」、「世の中グローバル化ですよ。国境なんか無いほうが良いんですよ」って言われますから、私が「研究費出すと、いつもグローバルリストにいじめられているんです。「あなたたちは分かっているじゃないですか。世界がグローバルだって言ったって、国境は無くならないでしょう。ボーダーレスとか言ってるから、イギリスがEUから出ていくとか言ったら驚くし、トランプがメキシコに壁を作ったら驚く。われわれは、全然驚きませんよ。壁が消えても、また生まれるんですよ」というようなことを、一所懸命言うのですが、「いやいや、国境を超える現象が大事なんです」「国境を超える現象が大事なのは、国境があるから超えるんでしょう」というような、基本が分かっていない、みたいなことをやるんですが、どうしても少数派なので、今日はこういうところで皆さんに支持をさせていただきたいと思って、出てきておるわけです。

それで、グローバルな世界はあるんですが、常に国境は生まれて消える。私は、人間というのは、境界が無いと生きていけないと思っているんです。人間はテリトリーが無いと生きていけない。領域が必要なんです。ただ、問題は、その領域がどのぐらいの広がりを持つとか、他の人の領域とぶつかったりしたらどうするかとか、そういうことなんです。だから、無くならないのだから、それを少しでもいい方向に変えることはできるのではな

いか、という問題意識があります。

北米の空港に行って飛行機を待ってたら、ビール飲みたくなります。大きい空港だとバーがありますから、気にしなくても良いのですが、小さいところの空港だと、いろんな物をまとめて売っていて、カフェみたいなテーブルで勝手に飲み食いしなくなっていきます。それで、ここにビールを買いにいってわけ。それで、座るわけですが、何か変な看板がある。で、じっと見ると、「アルコールを持って、この向こう側に行くのはいけない」と。線が引く張ってあるんです。「これ、だけど、勝手に空港会社が作った線ですよ。何で、こんなのに従わなあかんのか」ってことを思う。しかし、よく考えたら、北米の多くでは、パブリックな場所で酒を飲むというのが普通です。だから、パブリックな場所とプライベートな場所を仕切る線が要る。これは勝手に人間が設定してるわけですが、これが、もっと厳しい空間になってくると、国家となり、国境になっていきます。

そこで、「境界というものは、どうやって生まれていくか」ということを考えてみました。もともと、人間はテリトリーを持つてるのですが、定住してない人たちが、定住をスタートしたのです。小集団だった。そうすると、段々、生産力が高まるということがあった。それで、「ここまでが、うちのテリトリーですよ」と私たちがこういうのは農業なんかやるとそうなるのでしょうか——向こう側があるわけ。向こう側は、誰がいるか分からない。そういうのを、われわれはフロンティアと言っています——もちろんフロンティアっていても、本当は人がいたんじゃないかということが当然あります——ところが、どんどん生産力が高まって、共同体が大きくなって、国となります。それが隣の集団とぶつかるわけです。これはバウンダリーと言います。膨張して弾む。それで、バウンダリーというと、線ができるわけです。

問題はそこから先で、これが、いわゆる国境みたいになります。わが国で、日本で初めて、そういう国境をきっちり決めたというのはロシアなんです。これが、後の北方領土問題とつながっていく出発点になるわけです。

それで、フロンティアとフロンティアが接触すると何が起るかなのですが、よく考えてください。空間的に言うと、A1とA2って、本当に自然の違いがどれだけあるのか。サハリンと北海道、もう少し言うと、北海道の北の方とサハリンの南の方って、何か違いますか。食生活はあまり変わらない。自然的にはあまり変わらない所に、人間が線を引いていく。当然、食材や食べ物などは似てくるわけです。

住んでる人は違う、文化も違う。でも、沖縄も、そうじゃないですか。八重山と、あとは台湾の東の方と。パイナップルがこうやって来たのは、皆さんご存じのとおりです。

これを、どういふふうに表示するかというと、フロンティアとフロンティアが、お互いなくなつて国境ができるんですが、空間がそもそも自然的に似ているのが、人々が接触することで独自の空間を形成する。われわれは、これをボーダーランズと言います。このボーダーランズをどう設定するかというと、いろいろあります。抽象概念としてのボーダーランズというのがあります。ところが、このボーダーランズというものの特性を、国は非常に嫌います。例えば、アメリカとメキシコの国境のボーダーランズというところは、要するに国は違いますが、ヒスパニックの人ばかりいて、食べ物も似ている。アメリカの有名な研究者は、アメリカのメキシコ国境に近いところはワシントンやニューヨークとは違い、アメリカに近いメキシコの国境地域もメキシコ人とは違う、と言います。だけどそれは、実はいろいろな国に言えることなので、ヨーロッパでも日本でも。

ところが、それを、われわれは忘れてしまうのです。なぜか。国家にとってみると、国境は線じゃないと困るのです。国家というのは一つの国民国家で、ナショナルの歴史を教えるから、そこの柱が違つてはいけません。だから、われわれが、国境は幅を持つと考え、「ボーダーは機能を持っている。国境はグラデーションだ」と言うと、霞が関の人はたいへん怒ります。昔、私たちが根室を「国境地域だ」と言つたら、たいへん怒られました。「根室は、国境地域なのではない。国境は択捉の先にある」と言うんです。

結局、ポリティカル・マップで線を引くと、その中は全部均質的なものだといふふうに表示するというのが国家なのです。その中で——全部フィクションなのですから——同じような権利がある。そして同じような生活をしてるといふようなものを作ろうとする。時間は全部東京と同じ時間であるとか、同じ教科書を作る。そうすると、そこで地方の話はどう入れてくるかというときに、結局ナショナルなものとのコンフリクトを持つてはいけません。だから、北海道についても、弥生時代を「そんなもの無い。何だよ、近畿の一部の歴史じゃないか」などと言つたら、怒られるわけです。

世界史の先生方がおられますので、具体的な国境の話、引き方を話そうと思いますが、幾つか国境を研究するときのモデルというのがあって、一つ目は時系列で考える。二つ目は国境が何を通す、通さないで考える。三つ目は、人がパーセプションで何を思うかを考えるという、三つの考え方があります。

最初の時系列の話は、先ほども言った、メキシコです。境界地域というのは、次のように変化していつている。最初には要塞、つまり相手の空間と接触します。普通、最初から平和であることは考えません。だいたい戦争が起こつたり、紛争がある。そ

うすると、一番端のフロンティアであったボーダーランズは、だいたい要塞化するんです。要塞化するということは、行き止まりです。悪くすると、そこは戦争の最前線になる。だから、あらゆる国境地域には、必ず軍事施設があつたり、あるいは歴史的なトーチカや見張り台などがあります。これは対馬でも稚内でも全部そうです。

マルチネスさんが言うには、その後平和になると、お互い共存をするという段階があつて、その次はお互い交流をして相互依存が始まる。この段階が一番ボーダーランズにとっては良い。ゲートウェイです。そしてそれが進むと、統合となるわけです。

マルチネス先生は、「時代は要塞化、統合へ動いている」「一方通行である」と言われてます。地域にとってみると、要塞というのは行き止まりです。相手と交流ができない。これは、地域が死ぬということです。地域にとってみると、ゲートウェイが一番。そして、インテグレーションされると、素通りされてしまいます。これは、EUになつて、国境はあるが、素通りになつてしまふ、人と物が落ちないということになります。

それで、私たちがよく言うのは、「これは反転モデルではない」ということです。実を言うと、世の中っていうのは、逆に戻ることがあります。統合された世界がばらけてくる。ソ連という世界が良いか悪いかはともかく、統合されたわけです。それが分離してしまふ。つまりインテグレーションされたものが、もう一回バックするってことがあるということがとても大事なのです。ですから、先ほど言ったように、EUからイギリスが出ていったところで驚かない。そういうことはあります、ということです。

おそらく、世界ではいろいろな所に要塞があり、いろいろな所で共存があり、いろんなとこがゲートウェイになつて、絶えず行つたり来つたりしている。だから、統合できたからといって終わりではなく、また新しい境界ができるわけです。EUの中で統合されても、EUの外の壁が大きくなつてしまふというような。

ところが、EUの場合だと、いくつかの国は敷居が低い。これが、「透過性」という考え方なのですが、イタリアからだとなんか難民が入りやすい、フィンランドからだとなんかロシア人が入りやすい。一度入つてしまえば、イギリスやフランスに行く、ということを見ると、どこかに壁を作りたくなるわけです。だから、ハンガリーがセルビア国境に壁を作って、シリア難民を食い止めようとする。そういうことは、境界が消え、境界がまたできるということの繰り返しなのです。それは、「国境」という名の場合もあるし、国境と言わない場合もある。そういうことを見るということが、私は、世界や日本を見る上でも大事であらうと思つて、ボーダースタディーズというの言つています。境界が物を選択する、人の流れを選択する、物の流れを

選択するっていうことが大事です。

それから、3番目は、イメージです。国境という、最初に言ったように、要塞とか軍事的な緊張があります。だから、「領土問題をやってる研究者は全部右翼である」みたいに思われるわけです。行き止まりとか、悪のテロリズムは国境から来るとか。ブッシュ大統領曰く「行き止まりで辺境だ」と。われわれは、これは人が考えたものである、ゲートウェイを窓口とした国境はチャンスであり、hybridでinnovativeであるということをもう少し教育としてやったほうが良いということを考えてます。

そのパーセプションで一番有名な事例が、イスラエルとパレスチナです。これは国境ではありませんが、国境に準ずるような壁です。ところが、この「壁」という言い方が、実を言うとパーセプションです。イスラエル人はこう言います、「この向こう側からテロリストがやって来る。これはテロリストから、われわれを守るフェンスである」と。ところが、パレスチナ人から見ると、自分たちを抑圧する、高くそびえる壁であるわけです。フェンス・壁論争と言います。例えばこういうものを考える。同じものを見ても違うイメージ、です。アメリカ人から見たら、メキシコにある国境なんて、自由に通れるものでしょう。メキシコ人から見ると、そびえ立つ壁で、自分たちの行く手を阻むもの。

後で領土問題に入りますが、この領土問題くらい、人間のイメージが大きなものはない。日本はこれを抱えています。この中で一番分かりやすいのが竹島です。私、北方領土のことをよくやってるので、ソウルに呼ばれます。だいたい彼らは、「竹島問題・独島問題と、北方領土・南クリル問題を議論したい」と。それで、私は北方領土の話をしたり、韓国人の先生はこの比較するわけです。

そうすると、聴衆が黙っていません。私に言わないんです。韓国人の先生に、韓国のお年寄りが、「おまえは何を言ってるんだ。南クリルって、あのちっぽけな島を、最も聖なる独島と比べるな」「おまえは、それでも韓国人か」と。ちょっと待って、独島って、1kmも無いんです。今は、人が無理やり、そこに住んでるけど、元々は何も無い。5,000km²あって、人口2万弱ぐらいあった北方領土と比較するは、わたしは間違いと思いますけど、これはすごいなあと思って、椅子から落ちそうになりましたが、それを地で行ってるのが、東北アジア歴史財団なんです。今はあまり韓国人も来ないし、皆さんも行かないかもしれませんが、ソウル駅近くにあるんです、独島体験館。アルプスのジオラマみたいに、独島沖とか、そういうものがあって、日本が何回独島を挑発したかとかのグラフがあるんです。僕らはわかりますけど、例えば、アメリカの人やヨーロッパの人が見たら、「日本と韓国は独島・竹島で戦争するんじゃないか」と思うぐらい、すごい

挑発が書いてあります。

それで、よく見たら、こういうことなんです。われわれ日本人は「竹島」って言う。NHKが「竹島」って言う。北海道新聞が「竹島」って書く。それが「挑発一回」なんです。だから、日本の新聞が「竹島」と書くと、それがカウントされて、「日本、けしからん」と。これぞ「構築」です。だけど、笑えないんです。日本も同じようなことをやってるわけですから。

つぎに世界の国境の作られ方をやります。今ある国境は昔ある国境ではない、今ある国家は昔の国家でもないということ、やはり忘れてしまう。今の日本は昔の日本ではないし、今のドイツは昔のドイツではないとか、昔のポーランドと今のポーランドは違うとか、そういうことを言うのですが、国境の引かれ方というのを、ちょっと考えてみましょう。

先ほど言いました、フロンティアがぶつかってバウンダリーになる。ところが、一回バウンダリーになって世界が国境で分割されてしまうと、ルールができる。それでもう一つは、複数の国が一緒になったり、分かれたりする。先ほど言った統合とばらばらになるの繰り返し。それから、上からの力による線引き。これは、コロニアリズムです。ヨーロッパ、アジアの多くもそうだったし、アフリカもそうだった。そしてもう一つ、行政ラインの国境化というのは意外と大事で、ソ連の崩壊は、そういうことなのです。そういう、かつての行政概念が意味を持つ。

国境というのを、皆さん、上から権力が勝手に決めるなどと思うのですが、そうではないというケースも結構あって、下からの動きというのが結構大事なのです。

だから、地図を上から見て、「ああいう国がありました。こういう国がありました。国境変わりました。権力変わりました」という話ではないんです。そういうことを授業でどこまで教えるかという、それだけで終わってしまうので、「昔こういう地図でした。こう変わりました」となるわけです。

第2次世界大戦の地図ですが、ベルリンの位置は変わるはずはないのだけれど、ベルリンがどんどん東に移ります。つまり、ドイツがどんどん追いやられていったってことが、こういうものを見せると、単にドイツがどうと言うよりは、空間を考えるのにとっても良い。

それで、これは第2次世界大戦の話なんです、やはり人の移動が、戦争とともに発生します。昔の戦争は、もっと上の方でやって、人々はあんまり巻き込まれなかった。総力戦以後の体制だと、何人というアイデンティティを、国家でナショナリズムを作っていきますから、追い出される。そうすると、第2次世界大戦では、人が全部西に行っている。ドイツ人が移動させられて、ポーランドが移動するというような話も、ヒストリーを、ナ

ショナルなもの、そうでないものって考えていくには、役に立つと思います。

北欧のいろいろな歴史があって、今はEUで一緒になっているというようなこと。ベルリンの壁の跡。こういうのも、境界が消えたりするということの原因です。だけど、この境界が消えたって、人々の暮らしの——僕らは亡霊、ファントムと言いますが——ドイツは今でも、昔の東ドイツ側のベルリンに行くと、やはり治安と雰囲気の違いがあります。そういうものが残るということです。「こちらから向こうはソ連です。ソ連地域ですよ」というような話です。アメリカも、最初のアメリカと今のアメリカって全然違うわけで、どんどん戦争して広がったり、買収したりして、メキシコを結局追いやっていった。こういう、いろいろな境界線がある。

南米は独立するのが早いんですが、基本的にポルトガルとスペインからです。南米はとても大事で、ブラジルはポルトガル領だった。わかりやすく言うと、スペイン領が割れて国になるわけですが、このときに、行政区分が国境になるのです。実を言うと、この行政区分が国境になるという先例は、このときなので、今あるものをそのまま使う、と。

だからアフリカも、植民地国境、植民地ラインが国境線になるのですが、それは実を言うと、この南米の例から来てるのです。ついでに言うと、ソ連崩壊のときも、行政区分をそのまま国境にしたのも、これと同じなのです。

だから、南米、ある種のアジアの地域、アフリカ、ソ連崩壊後という流れで、今ある境界をそのまま国境にする。だから、そこは国境じゃない境界が、やはり境界があること自体で、ある種の国境になる。

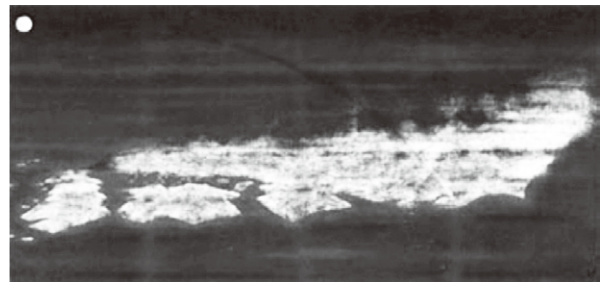
ところが、国境になった瞬間に、当然、壁が高くなりますから、紛争が起きるわけです。例えば、日本と韓国の竹島・独島問題も、皆さんよく忘れるのですが、朝鮮は植民地でしたから、その時代は境界は関係ないのです。日本が敗戦して、韓国が独立して境界を決めるときに、「竹島は韓国領だ」って言って、もめたわけです。ついでに言うと、韓国は、そのとき、「対馬をくれ」と言ったのです。それで日本は、「対馬は日本のものだ」と守る。しかし、竹島は、向こうが支配したまま。それで、植民地時代の争いというのが、やはり国境形成に非常に影響を与えていて、インドでは、パキスタンとムスリムの国と、インドが割れていくときに、カシミールが外れる、となったのです。

さて、日本の形ですが、まず、最初に言うておかないといけないのは、よく、文科省、政府的には、「日本には領土問題は二つしかない」と言います。「尖閣は領土問題じゃない」と。ところが、世界は全く「三つ」と思ってるわけです。世界で最も権威のあるイギリスの研究機関は、世界の領土問題の島に関し

ては26個あって、その三つが日本です。「この三つである」と。アメリカも、そう思ってます。

だから、僕、よく言うんです。日本政府が何ぼ言おうが、「世界は三つとしている。国境領土問題は三つ」と。韓国人に言うんですけど、韓国からすると、竹島は領土問題じゃないですから。「あなたがたが何言おうが、三つなんです。竹島も領土問題です」と。

このようなことは、学問としては基本なんですが、よその国のことを教えるのは良いのですが、自分の国の話をするとなかなか、最近の政治状況では厳しいです。どこかの議員さんたちが、北海道と沖縄が外れている日本の地図を出したら、「それは、おまえらは間違いを教える」と言うけど、間違いは、もともと日本の大和の権力は、松前はともかく、北海道も沖縄も無い。南東北も南九州も無いんじゃないか、という話になって、この地図があるわけです。



これ、どこにある知っていますか。飯倉公館という、外務省の迎賓館です。平山郁夫の『日本の列島誕生図』です。私、一度外務省の人に、「日露で『北方領土、日本の固有の領土』と、ここで記者会見して、ロシア人のジャーナリストに、『北海道も無いのに、何で北方領土か』ということを聞かれたら、どうするんですか』と言ったら、「いや、先生、やめてください。これ、歴史的な地図なんです」と。

そうです。歴史的な地図はこうなのです。近現代史以前の研究者はこれでよかった。僕は南九州ですが、隼人とか熊襲とか聞くと、ピンとくるんですが、これは要するに、南と北は別々だったのが、中が拡大していった、というのが、もともとの日本ではないですか。

ところが、最大限の日本というのを考えると、戦争中なんです。稚内も根室も対馬も与那国も小笠原も、全部、国境ではないのです。中継地だったのです。だから、小笠原の向こうにはパラオがあって、朝鮮、台湾があって、樺太の半分と千島があったんです。

つまり、日本も変わるということです。私、小学校の頃、授業で習いました、「日本は小さい国です。国土は小さいけど、加工貿易で一生懸命、経済発展しています」。今の教科書は違い

ます、「日本は海洋の面積だけとると、世界で6番めぐらいの海洋大国だ」という。「ああ、そうですか」と。当時は3海里でしたから、島は点なんです。宮本常一先生などの頑張りで離島振興法ができましたが、まあ、お荷物です。島に冷たいんですよ。

ところが、200海里で、海のフロンティアを囲い込める。EEZで、島が宝になったんですね。だから、「島を大事にしろ」という話になってるのですが、かけ声だけになってるところがあって、「軍事展開で、軍事連携しろ」とか言うのですが、島の人たちは、ゲートウェイだったりみたいなのところがあったり。

すると、現実には、このあたりは全部怪しい所です。「沖ノ島島も岩だ」っていうようにそのうち言われるようになるでしょうし、ここは取られてるし、ここも取られてるし、ここはもめてるし、みたくない。稚内は、この辺も決まってるんですけど、ちょっとだけ。

ところが、実際には、この海は、この辺の漁業は全部、暫定協定をやっています。ですから、暫定水域を使って、日中、日韓が使えるようにしてる。これはこれで、もめごとがあるのですが、しかし、この大事なことは、海というのは、こういうように共同利用をすることもできるし、国境線が線であるというのではないという、一番いい例です。実際に日本の周りの海っていうのは、こういう感じが現実だと。

それで最初に「地図というのは、政治的な地図である」と言いました。ということは、われわれが頭に描いている地図も、勝手にわれわれが作ったもので、しかもメルカトルで考えると、上の方は広がってしまいます。

1990年代に、富山県が富山を中心に描いた地図を作りました。最近、大学の先生が作ったのが、北海道を中心にした地図。これを見ると面白いです。オホーツクから日本海、大きいな。このユーラシア大陸の一部分が日本という考え方。中国人が見たらわかりますね。ここまで日本ですから。「日本は邪魔しとるなあ」みたいな感じがしますし、ロシア人が見ると、「日本と組んだら、太平洋は二人占めだなあ」みたいな。そうすると、やはり千島の問題です。どうなったかということを考えてみます。そうすると、最近では、九州の人が福岡中心の地図を作りました。そうすると、「南シナ海に近いなあ」みたいな。だから、要するに、こういうように、いろいろと歴史を考えると、話すときでもイメージが変えていけるということです。

それで、「われわれは、こういうネットワークを作ってきました」ということですが、特に、自治体連携っていうのをやっています。稚内、根室、士別、礼文、それから沖ノ島、対馬、与那国、竹富、小笠原。そこと組んで、毎回、セミナーとかイベントをやっています。今年は9月21日に、礼文島でやります。去年は、五島でやって、五島からチャーター便で済州島に行くとい

うなことをやって、ツーリズムで、今それをつなげてやるような感じですよ。

今年は、一種リレーで、稚内、オホーツクという、国境は渡らないのですが、国境地域を見るツアーということで。だから、各市と町の学芸員さんが支援してくれて、やろうとしております。それで、与那国とか、もちろん五島とかの市長とか、偉い人たちが来て議論をするということをやっています。当初は、稚内からフェリーでサハリンに行くとか、福岡から対馬を通って釜山に行くなどということをやっていました。

最後ですが、ツーリズムということをよくやっています。何でツーリズムをやろうかということになったか。ボーダーのことをやっていて、文科省のあるプロジェクトで、「実社会にもっと協力をしろ」というプログラムがあったんです。そのときのテーマが「観光」だったんです。

だから、最初は、別に観光をやるつもりはなかったのですが、「観光」というテーマで実社会を見たら、それは自治体とこれだけ付き合っているから、それを起点にツーリズムを作ったらどうだろうかと。はっきり言うと泥縄みたいなものですが、ところがよく考えてみると、われわれはさっきのネットワークでツーリズムをやっていたんです。ただそれは、行政の人や研究者だけで、稚内で滞留しサハリンに行き、与那国で滞留してチャーター便で台湾に行き、対馬で滞留し釜山に行くというのはやっていたわけです。

やっていたけど、「そうか、これをマーケットにすれば良いのではないか」ということを考えて、行政ネットワーク+ NPO 法人国境地域研究センターを作って、旅行会社とかホテルとか、そういう企業、対馬のスーパーや、稚内の建設会社や、根室の水産会社や、銀行さんも入っていましたが、そういうものと個人で作って、NPO 法人と行政ネットワークと大学の三つ、研究と民間と行政でやる、というのを始めました。

この出発点は、元々、「ボーダーのイメージが悪い。イメージは人間が考えるものだから、それを変えようじゃないか。それが地域にも役に立つだろう」というものです。結局、国境地域って、行き止まりになってしまうと、一番落ちるんです。どんどん減っていく。だからみんなで足を運ぼうと。

しかし、考えたら、対馬は行き止まりじゃなくて、対馬まで行って釜山に行くと、もっと楽しいじゃないか。稚内旅行だけ行くと、稚内から戻ってしまうが、稚内からサハリンへ行ったら、もっと楽しいじゃないか、ということを考えました。

この出発点は、やはり紛争地域が、砦が無くなってゲートウェイになると観光できるということで、元々、中露国境、ここは紛争の島だったんですが、中国とロシアがこの島を半分で割っ

たんです。それでこういう感じで友好関係ができて、今は観光地化しています。それで、われわれは日本人のツアーを連れて、かつての紛争の島で観光するというボーダーツーリズムというのを、今プロデュースしています。

今までのツアーの経験から得たものというのは、ボーダーツーリズムの本として出版しています。それから、NPOの方で作って、北海道大学出版会で売っていますが、結局、ボーダーランズの地域の本が無いじゃないかっていうことで、対馬を皮切りに、稚内とか根室とか与那国とか、そういうものもパンフレット形式で、観光にも使える、だけど地域の歴史もある、ボーダーツーリズムもできるってのも出しています。

だけど、これを結構喜ぶのはメディアなんです。メディアの人の方が参加者が多いのではないかっていう時期がありました。いろいろな所でやりました。国境を越えないツアーというのもやりました。今度の礼文島もそうです。でも、超えた方が楽しいです。新潟とか福岡から中国へ行くのもやりました。小笠原も行きました。小笠原は遠いです。それで、『現代用語の基礎知識』に、「ボーダーツーリズム」というのが出たりしました。どんどん拡大してます。国境を越えないものとか、第三国に行くものとか。

結局、空間と場所を体感できるというのと、解説する人たちの、このストーリーが大事です。そこでアカデミック・ツーリズムです。例えば稚内まで行って帰ってしまうと、それで終わるのですが、稚内に行ったらそこが終着点ではなくて、そこから出発になるんです。国内旅行と海外旅行を続けてやるって、これは日本の旅行業界で今まで全く無いことだった。だから、旅行会社の人は喜んで、新しいマーケットとしてやるのです。

そして、国境がグラデーションになるということが、よくわかります。これは、グラデーションの話と少々違いますが、私は福岡が長かったので、新千歳空港着陸のとき、まるでハバロフスクに降りるような気がしました。それで、北海道に慣れて福岡空港に行くとき、降りるとき、シンガポールに着くよう気がします。

つまり、どこからどこに行くかということで、人間の感覚は変わるのです。成田から行ったら海外旅行ですが、それはもう、出発点と切り離された世界です。稚内からサハリンに行くと、何を思うかという、サハリンに着いた瞬間に、「ここは北海道だ」と思うんですよ。それでサハリンの人が来ると、「ここはロシアだ」と思うんです。その話が、ボーダーランズを考える、そのこの歴史や地理を考えるときに、とても意味があります。

この問題は、弱点があります。行って、単線的に往復しなかったり、行ってぐるっと回り、それから解説者を付けたりすると高いです。高いといっても、20万〜30万程度で、豪華クルーズ船のような話でもありませんが。

だけど、日本人の日本のマーケットというのは、格安が普通なのです。「安かろう、まずかろう、つまらん」というのに、みんな行くのです。それか、豪華クルーズ船。しかも、北海道の中のボーダーランズツアーって、これは、「利尻、礼文、行きましょう」と。「そんなもん、自分でレンタカーで行けるよ」って思うでしょう。そうじゃない中身を提供するというのは難しい。わかってくれない。

サハリンとなどであれば、人集まるのです。なぜなら、サハリンに自分で行くのは大変です。だから、そういうのは良いのですが、今ある世界を違う形で見せるツアーというのは、集めるのがなかなか大変です。

方法は一つ。ゼミ旅行や修学旅行で行く。修学旅行は良いです。立命館慶祥の先生がたは、ボーダーツーリズムもやられています。修学旅行で、特に歴史教育とか社会科教育で、こういう発想でルートを作ると、ちょっと高いのですが、スタディツアーとしてはとても良いと思います。

サハリンに行く前は、まだ船があった頃、稚内で見ただ後に、サハリンに行くと、「こういう郷土博物館が、日本の建物が」とか、「国境の標石が、かつての北緯50度にありますね」とか、語り部の写真家の人が説明したり、大鵬がいたら、一緒に四股を踏んだり、「トーチカがありますね」とか、「ここは製紙会社の廃墟がありますね」とか、見ているだけで面白いです。それで良いのです。これは国境標石の跡なのです。北緯50°線に石があったのですが、今は何も無いんです、国境が無いから。みんな、「ここに国境があった」と思って、はしゃいでいるという。こういう楽しいことを、やっているということです。

これがボーダーイメージを変えることにもなるし、教育にも非常に役に立つ。今日、高校の先生方が多いので、ぜひ、ボーダーツーリズムを、そういうものに入れてほしい。ボーダーツーリズム推進協議会というのもできています。

とにかく、現場に行って考える、現場に行って体感して、接して。歴史ですから、世界史でも日本史でも何でも、上から目線で、見なければいけないことがあるのですが、実は、その下にある現場の話、「自分で行って、考えろ」みたいな話です。やはりボーダースタディーズの基本は、「足で稼ぐ、自分の目で見、全てを疑う、全てを崩す。そこから、もう一回作り直す」ということが大事だと思います。

ちょうど時間になりました。どうもありがとうございました。

パネルディスカッション①:「北海道と沖縄から歴史教育を考える」

報告1

ビザ無し渡航の経験が高校生に与えたこと

北海道札幌北陵高等学校 本間靖章

北海道根室高等学校卒業生 小島竜

北海道札幌北陵高等学校に勤務しています、本間と申します。私は、現任校ではなく、前任校が根室高校だったので、そのときの経験等を基に、今回、ボーダーヒストリーというテーマの中の一助になるように、また、われわれ歴史教育に携わる者が、このボーダーというものをどう捉えて授業の中に生かしていくか、教育の中に生かしていくかということを、実際にビザなし渡航で色丹島に訪問しまして、その中で感じたことから大きな考えの変化を自分自身にもたらしたという大学生の経験を基に、報告をさせていただきたいと考えました。このようなことから、あくまで一つのケーススタディとして、授業のあり方というものを考えるきっかけになればという趣旨で、今回の報告を作らせていただいております。

最初に、根室市および根室高校の取り組みについて、少しお話をしたいと思います。北海道や根室と言いますと、やはり、北方領土問題に関する関心が非常に高いというように考えられる方が多数いらっしゃると思います。ただ、実態としてはどうなのかと申しますと、実は、北海道公立高校の入試問題で、北海道の公立高校では必ず北方領土に関する問題が、高校入試の中で最低一題は出題されるということになっています。

問題の内容を見ていただきたいのですが、実は、「島の名前を書きなさい」というようなものなのです。このように、通りいっぺんの知識を問うものというのが正直な現状で、必ずしも北海道に生きる者として北方領土をどう考えるか、というようなことを揺さぶるような、梃子になりうるようなものではないというのが現状です。

ただ、それでも根室高校は、北方領土返還運動の「原点の地」にある根室市にあり、実は、根室高校の4階の展望室に行くと、国後島が見えます。そのぐらい非常に身近なものであります。私が勤務していたのは5年前までなのですが、在任中に、実は、国後出身で、ルーツがウクライナにあるという子が生徒会長を務めたりということもありました。実は、皆さんが思っているようなイメージとは、またちよつと違う側面も持っているかと思えます。

ただし、北方領土返還運動の地であることから、各学年「総合的な学習の時間」の中で郷土学習の枠を取り、必ずそれぞ

れの学年・段階に応じた北方領土問題についての講演会を開催しています。

また、北方領土根室研究会という、部活形式で北方領土を研究する機関があり、そういう形で、北方領土問題に対しては、他地域に比べると、より深く学習はしているかなと思うところではあります。

ただ、授業する、講座を開くということと、実際に体験する、考えるということは、また別の問題ですので、そちらの方は、実際に3年間の高校生活を経て、この春、大学1年生になりました小島竜君が、根室での生活や色丹島へのビザ無し渡航の中から、どのようなことを考えたのかということをお話してもらい、われわれ教員として、それをどう受け止める、どう生かすべきなのかということ、少しだけ提起させていただきたいと思います。

(以下、小島竜氏の報告)

ただ今紹介にあずかりました、北海道根室高校を卒業しました、小島竜と申します。よろしくお願ひします。

「ビザ無し渡航の経験が高校生に与えたこと」というタイトルで、お話しさせていただきますが、まず、ビザ無し渡航以前の僕の北方領土問題の認識として、根室という地域柄もあって、小学生の頃から、そういった教育を授業の一環として受けていました。根室には、北方領土についての資料館みたいなものがありますが、そこで実際にお話を聞いたりする教育を授業の中で受けつつ、中学校のときに生徒会に入ったんですが、生徒会活動の一環として、そうした根室で行われている北方領土に関するイベントの参加、また運営ということにも携わっていました。そして、高校では、先ほど紹介があった北方領土根室研究会という部活に所属していました。そして、僕自身も国後島の島民三世であることが中学校のときにわかったので、そのこともあり、領土問題の認識はありました。

続きまして、ビザ無し渡航についてです。僕は色丹島に行ってきたのですが、渡航時の注意事項としまして、事前研修がありました。その事前研修の中で何を言われたかということ、まず、行動の制限です。「単独行動を絶対にしないでください」ということをまず言われて、その次に、「電波を拾わないでください」と言われました。これは、北方領土のロシア側の電波を拾ってしまうと、相手のロシアを認めてしまうようなことになってしまって、そういった行動と、言動の制限もされました。「あちら側の領土だと認めてしまうような言動、また、こちら側の領土だと主張するような言動を控えるように」と言われました。

しかし、実際に渡航する際に、紙幣はロシアのものを使って現地で買い物をしたとか、そういった矛盾も感じられたのです

が、現地の様子としては、ルーツというか、日本っぽさという部分は感じられませんでした。

第一印象としては、「もう、ここは異国だな」というのが最初にありました。自然は、やはり聞いていた通り豊かで、景色がすごく良かったのですが、その反面、インフラは整っておらず、さびれた街並みというのが見受けられました。そして、ホームビジットの際に、共存について話してくれた方がいたのですが、意外にポジティブな印象を持っていて、「共存したいね」というような話をしていました。

そして、僕がこれからのこととして、「今もし返ってきたら、どうなるんだろうな」と思いました。そうすると、やはり文化や街並みはロシアです。そして、岩下先生もおっしゃった通り、コミュニティも親近性があまり見られないので、日本人がもし住むとしても住みづらいらなと思うし、帰属の問題もあります。

また、ビザ無し渡航の同行者の中に、「北方領土はロシアの領土だよ」という意見を持っている方がいたのです。ものすごくレアな人だと思うのですが、その人は実際にロシアの資料館などに行って、そういう書類やロシア側の主張をしっかりと見てきて、本当はだめなのですが、ビザで島に個人として渡航したこともある人でした。本来ならば、多数の人がその人に対して「まじいんじゃないか」と疑問を抱きがちなのですが、僕はそれを聞いたときに、「それもやはり、ありだよな」「一つの意見として、あるな」と思ったんです。それはやはり、僕たち、根室の地域柄といいますか、小さい頃から教育されてきて、こういうような「常識」というか、日本側の主張だけを、僕たちは伝えてこられて、勉強してきて育ってきたわけで、その日本側の常識だけで日本の領土だって決めつけるのも、よくないと言いますか、多面的な視点を持っていないといけなかなと思いました。

そして、そういった部分から感じたのは、様々な部分でギャップが生じているなと思いました。ギャップというのは、正しいこととか、常識とか、「こうあるべき」という事実に対して、実際の個々人の心情とのギャップがあるなと思ったのです。

そこでまず、ロシアとロシアの国民に対してなんですが、ロシアというのは秘密国家なので、やはり個人は言いたいことを言えない、胸のうちの簡単にさらけ出すことができない。だから、ホームビジットとか、狭い閉じたコミュニティの中では、結構素直に言ってくれるのですが、公の場や大きな場所では、言いたいことは言えない、という部分があると思います。そして、それは日本も同じで、日本と日本国民という中では、四島返還を訴える人もいれば、「二島返還でいい」と言ってる人もいますし、北方領土問題に対して興味関心のない人というのも多くいると思います。

日本の中では、2月7日の北方領土の日に北方領土の大会——正式な名前を忘れましたが——そういった催しが全国各地であります。僕は根室の大会に出たことがありますし、東京の大会にも出させていただいたことがあるのですが、東京の大会ですと、結構静かなのです。静かに、それぞれの島民だったり、偉い人が前に出てきて見解を述べたりという場で、それに対して聞いている元島民の方は賛同の拍手を送ったりというような感じなのです。根室の大会はどうかと言いますと、鉢巻きしてシュプレヒコール、皆で「返せ」と言っていて手をあげたりしているのです。そういったギャップもあるので。

そこから今、東京と根室の話したのですが、「根室の中で、じゃあ、どうなのか」という実際の話をしていきますと、シュプレヒコールで「返せ」と言ったりとか、街中の看板にも「返せ」という強い言葉、強いフレーズというのが、よく見受けられます。先ほどの東京だと「早期返還」というようなワードを使ったり、物腰柔らかい感じに比べて、根室は、すごく強い言葉を使っているイメージがあります。そして、根室の中でもギャップがあるというのは、アンケート結果があるのですが、たしか5年前ぐらいに取ったアンケート結果なのですが、「若者の7割近くが北方領土問題に対して無関心である、無意味」という回答があったのです。実際に僕も、こういうように各地で出前講座とか、根室市内でやることもあるのですが、道内道外いろいろなところでやってきましたが、やはり活動していて、正直なところ「ああ、これ、あまり意味ないな」とか、「無関心だな」と思うことも多々ありました。

岩下先生がおっしゃっている通り、根室は漁業の町なので、「海域だけはほしい」という人が半数以上だと思います。そして、シュプレヒコールとか、そういう活動を熱心に続けている方というのは、若者はあまりなくて、年は40～50代とか、あとは元島民の方とか、二世が精力的に行っている感じです。「若者にどんどんつなげていって、返還運動の輪を絶やさないようにしよう」というようなスローガンを掲げているのですが、実際、根室の若者というのは、根室には大学がないので、進学して若者もいなくなってしまいますし、そういった輪をうまく引き継がないという現状もあります。

やはり根室の未来としまして、漁業が盛んになるという、そういった部分で、根室に残る人は非常に強い意識を持ってやっているのですが、われわれ若者からすると、やはり根室から出ていってしまうので、そういう部分でもモチベーションと言いますか、意識は低いと思います。

私は、北方領土研究会に3年間所属していましたが、研究会の中でもモチベーションの差というのが、実はあります。それ

はどういうことかという、北方領土研究会という、すごい堅く聞こえます。活動内容も、北方領土に関するラジオを収録したり、「外で出前講座など行っています」というのが表向きなのですが、実情としては、出前講座というのは、もうテンプレートの原稿が実はあって、スライドに合わせてそれを読むだけなのです。

そういうような現状で、だいたい入会する会員は、出前講座というのは、道外に出たりとか、道内で札幌などに行けたりするので、そういう旅費を全部、根室や国が持ってくれるので、そういうのが目当ての人が、ほとんどです。もちろん、モチベーションがある人もいますが、実際、僕もそれ目当てで入りましたし、やはり活動がしたい。北方領土というよりは、その活動に対して積極的にやっていきたので入りました。僕は、そこから、いろいろ結果として学べたので、プラスだったかなとは思いますが、そういう感じで、北方領土研究会だからといって、北方領土に対する問題意識が高くて、北方領土のことを常日頃から考えているというわけではございません。

そして、こういう、国と個人という部分で、こんなにギャップがあって、こういう小さなギャップの積み重なりというのが、北方領土問題を長期化させることにつながっているのかなと考えました。どうしても、高齢の方だと、いまだにロシア人に対して怖いイメージ持ってる方もいるんです。だから、そういう部分でのイメージもありますし、そういったギャップが、ビザ無し渡航を通して感じられてきました。

そして、最後の話なのですが、3年間やってきて、卒業して札幌に出るといときに、北方領土の活動組織で千島連盟というものがあるのですが、これに誘われました。「入会してくれないか」という感じで誘われたのですが、お断りしました。3年間、活動をいろいろな所で行ってきて、経験としては豊富なのですが、どうして断ったかという、やはり公的なもの、オフィシャルなものが先立っていて、出前講座だと、原稿に則ってしゃべるだけという、レールが敷かれきった中で行う活動に意義を感じられないなと思いました。

東京の大会に向かう際に、テレビの取材があったのですが、そういうテレビの取材でも、「こういうシーンがほしい」とか、「おばあちゃんの写真がほしい」というような、いわゆる、やらせではないですが、「こういうふうにしてくれ」という要望があって。何か、どうしてもそういう日本の常識といいますか、欲しいものに対して、こちらが答えを近いものを出してあげる、みたいな感じに受け取ってしまって、どうしても……。こういうふうに活動を続けてる理由として、様々な方が、「おばあちゃんの島」、「お父さん、お母さんの島」というような理由が挙げられるのですが、

実際としては、「それだけの理由で、そこまで活動ってできるのかな」と疑問を抱きました。

こういう活動をしていると、「北方領土が返ってくるかどうか」ということを聞かれるのですが、僕としては、返ってこないかなと思います。それは何故かという、先ほど言ったように、こちら側の見解は、ずっと同じようなことを繰り返して、実際にこういうふ活動してる人がどう思っているか、どう感じてるかという、生の声を届ける機会は実際少なく、オフィシャルの操り人形みたいな感じに、ずっと繰り返していくことに意味がなく、多面的にもっと取り入れるべきだと思いました。こちら側の意見だけでなく、ロシア側の主張なども取り入れるべきことが、問題意識に対して向上につながると思いました。

以上が、一個人がビザ無し交流から学んだことです。ありがとうございました。

(以上、小島竜氏の報告)

今話したことは、あくまで「実際に渡航した経験から思ったことを、こういう学術の場で、率直に話してほしい」ということを話し、打ち合わせをした中で、彼から出ています。実は、小島君は大学では歴史学を専門にはしていません。そういう中で、自分の経験を本当に率直な、現在の考えを語っていただきました。

ナショナルな、公式なものと考えたときに、正しくないというようなお考えやご意見等も、もしかしたらあるかもしれませんが、こういう場なので率直に思ったことを話してくれたということで、ご理解いただきたいと思ひますし、そういう反論は、岩下先生が請け負っていただけると、そのように伺っておりますので、よろしくお願ひいたします。

先ほどの話したように、私は小島君とこの会議に先立って何度か打ち合わせをしていたのですが、全くそういう、歴史学を専門にしていない彼の中から、歴史学にとってすごく重要だなと考えられるものを感じました。

私自身は、国民形成史を専門にやっていたのですが、ナショナルなヒストリーとパーソナルな経験に根ざしたものは、必ずしも「公式」と正しくなくて良いというものだったり、もつと言えば、やっぱり根室にいる限り、「北方領土が返らなくちゃいけない」というような教条的な考え方がある中で、もしかしたら、実際の生の経験をしながら、そういう物事を相対化して彼自身が考えたことによって、自分の考えを持つに至ったのかなというのを、すごく感じながら聞き取りをしていたんです。

そういう中で、私たちが授業をしていく中で、大変重要なことが本当にあると思ひました。どうしても教科書を機械的に教えてしまうと、すごく無味乾燥な、他人の歴史になってしまう

すし、今の話では、「北方領土を返せ」という教条的なもののみで終わってしまって、「それが正しい、そうじゃなくちやいけな」とどこかで思う中で、括弧付きの「正しい」というのをやらなければならないというところが、逆に、問題を自分ごとにした、自分の考えを持つということを妨げることもつながるのではないかというのを、小島君と話している中で、自分自身、反省させられることがありました。

自分自身の問題として捉えて、自分自身で考えて自分の見解を持つ。最近の教育改革の中では、「自分ごとにする」というワードになってますが、彼は実際、この大きな、渡航をするという経験をした中で、もしかしたら、この北方領土問題を自分ごとにしたことで、物事の考え方を、国家として正しいということ、ロシア国家として正しいということ、そのパーソナルな部分、という層に至ったのかと。そういう階層があつて、なかなか、一辺倒の通史を教える授業では、やはり難しいのかと思い、では、どうやって授業したら良いのか。生徒全員、ビザ無し渡航に行かせるわけにはいかないので。

その中で、やはりこれからは、資料というのが歴史につながる一番の入り口になるかと思えますし、あとは地域ですね。先ほど、実は、いろいろな先生と話している中で、岩下先生の話にもありましたが、「歴史」というと東京の歴史であり、北海道だと札幌の歴史であり、沖縄だと那覇の歴史なのです。中央の歴史でしかない。それが、もしかしたら「郷土」という入り口、根室が、はっきり言えば、主権問題、領土問題、国境問題という、国際問題の入り口になって、もしかしたら、ここから「主権とは何か」という考えに至るかもしれない。「共存とは何か」、「共生とは何か」というところに行く入り口にもなりうるわけです。

そういう中で、資料や、自分の住んでいる地域というのが、どう世界の歴史や日本の大きな物語に接続されているのかということも、様々なものを自分ごとにしていく大きな入り口になるのではないかなということ、彼と準備をしている中で、私自身、勉強させていただきました。

私自身も、「じゃあ、授業をどうするか」ということに関して、まだ、はっきりとした明確な答えをもっているわけではないですし、「根室で経験したことを、では札幌で」というと、やはり全然スムーズに行くとは思いません。

現在、札幌で勤務をしている中で、「そもそも北方領土問題が、こういう問題だ」という認識があるスタートだったのが根室の子ですが、やはり北海道全体で考えたときに、先ほど話した通り、島の名前を知っているかとか、そういうことが北方領土問題についての知識、認識になるようなレベルですので、同じことができるとは思いません。ただ、こういうアプローチの仕方が自

分ごとにする一歩、切り口としてあるんだろうなというのを感じました。

これから先、様々な先生方の工夫で、私が言うことではないのですが、作っていく、生徒が歴史を自分ごとにして自分の見解を持つ、パーソナルな層で考えることも必要だということを、彼から教えてもらったなと思っております。

まとまりのない話で申し訳ありませんが、以上で報告を終わらせていただきます。

報告2

沖縄における世界史・歴史教育

沖縄国際大学

藤波 潔

沖縄国際大学の藤波と申します。

いただいたお題が「沖縄における世界史・歴史教育」という非常に広大なタイトルでして、4月の頭ぐらいでしたか、琉球大学の池上先生からご依頼がありまして、逡巡したんですが、お引き受けしました。ある種の運命かなと思って、お引き受けしました。

というのは、私は北海道釧路の出身で、釧路湖陵高校の40期生です。今、沖縄の大学で教職課程を担当しているということもあり、やはり北海道出身の人間が北海道の会場で沖縄のことを語るべきかな、と思ひまして、お引き受けしました。

湖陵高校を卒業した後、日本大学文理学部に行き、西洋史を専攻しました。その後、日本大学鶴ヶ丘高校で世界史の教員をやり、文理学部の助手を経て、2002年の4月に沖縄国際大学に赴任して、今年18年目になります。

さて、報告の狙いについては三つあります。まず一点目です。今日のテーマにもありますけれども、「周辺の歴史」というものです。周辺の歴史を周辺だけで教えることというのは、やはり問題があるだろうという前提に立ちます。ただし、教える側を育てる、教員養成の点に問題があるのではないかと常々思ってます。自分の大学で改革してないことを棚に上げてということにもなりますが、養成の問題をお話ししたいと思います。

それから、二点目として、沖縄県内60校ほど高校があり、その中の1/3ほどで、学校開設科目という形で、琉球・沖縄史関係の科目が開設されているのですが、そこに係る問題についてお話ししたいと思います。

そして最後に、周辺の歴史として位置付けられ得る琉球・沖縄史を、どのような角度から学習していけば良いのか、という可能性について考えてみたいと思っております。

さて、沖縄県内九つの高等教育機関があるんですが、その高等教育機関の中で高等学校の地歴科教員の教員養成課程を持つてる大学が3大学も、と言うべきか、3大学しか、というべきか、ありません。琉球大学と沖縄国際大学と沖縄大学になります。その学部も、いわゆる歴史系の学部とか学科ではないというところに、一つ特徴があるかと思えます。かつて、琉球大学に史学科というのはありましたが、学部改革の結果、史学科がなくなってしまったので、現在のところ、私の勤める大学も含めて、4年間、入学段階から歴史だけを専門に学ぶ学部学科というのは存在しておりません。その中で、高校の地理歴史の教員を養成しているということになります。

沖縄県の教員候補者の選考試験結果なのですが、地理・歴史は一番下のところで、非常に採用数が少ないです。年間2、3名といったところなんです。その中で、この数年は、中学校社会科の採用が非常に多くなっておりまして、14.5名の採用になっている一方で、地歴は2名、3名というところになります。私どもの大学は、割と卒業生が頑張ってくれて採用してもらっているような状況ですが、この数字に表れない、いわゆる臨時任用や非常勤という形で、実は、本学卒業生のみならず、多くの人が教育に携わっているというのが現状になります。

その一方で、沖縄県の教員採用試験の問題なのですが、全問マークシート方式です。試験時間110分の中で74問に答えるという出題になっています。問題を読む時間、考える時間を考えると、非常に瞬発的なというか、どんどん解いていかないと時間が間に合わないというような状況になっています。内容的には、センター試験と類似のレベル、それから、出題の問題が多いかな、と思うのですが。ただ、この採用試験、もちろん1次試験の形式がこれだというだけで、この後、2次試験もありますので、これだけで判断するわけにはいかないのですが、採用試験で問われるのは知識の部分であって、幅広い知識を持っている人たちが1次試験を突破しやすいという状況は、今言われている教育改革というような観点から考えても、また、歴史を将来教えるという資質という点から考えても、少し問題かなと考えています。

本学において、地歴の教員や社会科の教員、どれだけ免許を出しているのかということですが、端的に申しますと、先ほど、「実習生が、ここ15年で半分ぐらいになっている」ということもありましたが、教員免許を取得する学生自体が減っております。ただし、私が所属している社会文化学科というところだけが、学則定員が80名で実際90名ぐらい入学するのですが、そのうちの15名前後が地歴の免許を取るところで、少々多めになっています。

ただ、やはり養成課程で、これは本学だけではなくて、日本のいわゆる歴史系の学部学科ではない、開放性の教員養成をやっているところの大学では皆そうだと思うのですが、やはり問題があるのは、従来の「教科に関する科目」、新しい法律では「教科及び教科の指導法に関する科目」のところで、歴史系に関しては、日本史4単位必修、それから外国史がIIで合わせて4単位必修というだけで、他のいろいろな科目も取っているわけですが、これで終わってしまうというところなんです。先ほど申し上げた通り、社会文化学科は、歴史を専門として卒業論文を書く学生もいるのですが、必ずしも歴史専門の学科ではないので、学科専門の方で歴史を学ぶということも少ない中で地歴の免許を取って現場に出ていくという卒業生が、少なからず存在します。それに比べて、地理系の科目に関しては16単位必修科目があつて、ちょっとアンバランスかな、とも思っています。

一方で、経済学部の地域環境政策学科という学科でも、やはり歴史系の必修科目は日本史・外国史合わせて8単位しかない一方で、地理系の科目がこんなにたくさんあるというような状況です。もちろん、地理も大事ではあるのですが、限られた単位数の中で、どのように単位を考えているのかということは、わが大学の問題ではありますが、恐らく多くの私立大学は似たような状況ではないかと思っております。

更に本学固有の事情でいうと、いわゆる教科教育法については、中学校社会の免許を取る学生と、高校地歴の免許を取る学生と、高校公民を取る学生は、教科教育法が別々になっています。なお、中学校と高校、両方取りたい学生に関しては、この中学校社会の教科教育法を取っていくという形になります。

2年生の前期までに最低限この三つの科目を取ることが前提条件となっていて、これを取っていれば、例えば中学校社会科の免許を取りたい学生は、2年の後期から社会科公民科教育法を取って、階段を上がって、実習に行くという形になります。高校だけの免許しか要らないという学生は、3年の前期から教育法をやって、教育法演習をやって、という形になってきます。

そこで、それぞれの教科教育法ごとに担当者が当然決まっていますが、私は中学校社会科の教員養成をやっているゼミの担当で、もう一人、教育哲学を専門とする教員とペアでやっています。高校地歴は、二人とも地理学の専門の教員が担当しています。もちろん、このお二方も高校での教員の経験がある方ではあるのですが、必ずしも歴史を専門としていない方が、高校地歴の教科教育法、特に本学の場合ゼミ生全員が50分の模擬授業を必ずやるというシステムになっているものですから、その授業の指導も含めて、歴史的な専門家の観点が入っていか

いというところが、少々課題かと思っております。

以上、本学の問題ということで挙げましたが、カリキュラム上の課題としての歴史関係の科目が少ないこと。当然、科目が少ないので通史科目にならざるを得ません。それから、教免法の関係で、一般的・包括的な科目という位置付けになりますから、特殊なこと、なかなかできないということがあるので、内容的にも、少々制約がある。更に、高校地歴教員の担当の専門性が偏在していること。

それから、沖縄県以外の学校でどうなってるのが少々わからないのですが、沖縄県の学校、中学校も高校も合わせて、時間の短縮とか入試の対策などという部分があって、ワークシート活用方式の授業が、とても多いのです。

それを受けた学生たちが模擬授業をやって、教育実習に行くので、どうしてもワークシートを使うという授業が横行してしまう。つまり、知識や自分の考えをまとめて、それを表現させるような、ノートを使つてうまくそれをまとめさせるような、そういう授業が少ない。そういうところもあり、この辺りはちょっと直していかないといけないのですが、実は、この課題というのは、沖縄県の高等学校現場の多くの先生方の授業実践が抱えている課題と直結してるとは思いません。

というのも、先ほど言った通り、学生たちは自分が受けた教育体験を基に、自分の授業観というのが形成されていっており、それをどこかの段階で大きく変えないと、新しいものになかなかチャレンジしていかないというところがあります。ですから、ワークシートに基づいた知識中心の授業というものが拡大再生産していく。それと同時に、その出発点を探っていくときに、これは学術的な裏づけがあるわけではないのですが、かつて、高校教員を20年ぐらいやっていた同僚がいたのですが、その方から、「世界史必修化のときに、世界史を担当される先生を、どうしても確保しなきゃいけないというときに、それまで政経とか現社とかを担当された先生が、どうしても担当しなければいけないというときに、授業の形式が割と単純化された形式というか、知識一辺倒の授業になってしまったというようなことがあって、それが、ずっと尾を引いているのではないか」という指摘がありました。そこが今もお継続してるのかと思っております。

こうした課題を抱えている沖縄県の高校の歴史教育において、いわゆる沖縄の歴史というものが、どのように認識されているかということなのですが、やや古くて恐縮なんですけど、2012年5月15日、復帰40年の年にあたっています。県内の新聞社が、こういう報道をしました。「復帰の日を知ってる高校生が15%しかない」という記事なんです。このことに対して、沖縄県の歴史教育の先生方のグループの代表を務めている新城先生とい

う方が、「全国一律の歴史教育の下で沖縄の歴史を学ぶのは難しい環境にある」と指摘されていて、「県教育長の復帰教育実施の通知の成果ではないか。一過性に終わらず、沖縄史を体系立てて学ぶカリキュラムを組み込んでほしい」という要望を述べられています。この「県教育長の通知」というのが同じ年の4月に出されていて、「沖縄県教育長が、復帰40年の節目を期に復帰前後の沖縄の状況や今後のあり方について、生徒に認識を深めさせる取り組みを実施するよう依頼する文書を送付した」という内容になっています。

今の新聞報道は、「5月15日というのが何の日かを知ってる高校生が15%しかないんだっていうことを、県民の皆さん、どう思いますか」という問いかけなんです。これ、5月15日に限らず、4月28日や6月23日というのは、沖縄県にとってある種大事な日で、「これは県民がみんな知っていて当たり前なんだ」「沖縄県にとって常識の日なんだ」と言われるのです。何年か前に出された佐藤卓己先生の『八月十五日の神話』ではないのですが、「この日が何の日かということを知ってることだけで、果たして良いか」ということです。

沖縄県立博物館の展示ではないのですが、どうも沖縄県のマスコミや、いろいろな報道、それから県民世論もそうなんですけど、「沖縄だけ」もっと言うと「首里・那覇の歴史だけ知ってれば、いいんだ」「出来事だけ知ってればいいんだ」という風潮が強くて、「ほんとに、それで良いのだろうか」というのが、私の疑問の根底にあります。

琉球王国以来、沖縄は、世界の多様な地域との関係の中で歴史を築き上げてきました。当たり前の話ですけど、決して沖縄だけで沖縄の歴史というのが構築されてきたわけではないのに、戦前期の歴史についても、多様な歴史があって、決してそれは言えない歴史でも何でもないと思うのですが、そういうものを、なぜ取っ払ってしまうのか。

「沖縄の歴史で中学校と高校で学んできて、何が印象に残ってる」と学生たちに聞くと、「とつてもつらい思いをした沖縄戦の歴史」「悲惨な時代」「沖縄が、とつても世界に羽ばたいて輝いていた琉球王国の時代」。「華やかな時代」と「悲惨な時代」、この両極しか印象に残ってないという学生が、ほとんどなのです。それ以外の多様な歴史が、どうも「何月何日が何の日であるっていうことを知ってれば事足りる」という、その風潮の中で、捨象されてしまっているような懸念を抱いております。

その一方で、沖縄県内の1/3の高校では、学校設定科目で琉球・沖縄史の科目が開設されています。しかしながら、シラバスや学校要覧などを調べますと、全ての高校が必修科目ではなくて選択科目であり、多くの高校が2単位で開設されています。と

いうことは、年間原則 60 時間ぐらいやらなければいけないかもしれなが、そこまで行かないわけです。

最初にも申し上げました通り、沖縄県内の大学では歴史学の専門学部学科はありません。ですので、当たり前の話ですけれども、琉球とか沖縄史を専門的に大学時代に学んで、現場に就いていられる方は少数になります。それと、さっき言ったように単位数や授業時間数の制約があって、どうしても長い沖縄の歴史を、ぎゅっと詰め込んで教えなければいけません。更に、全ての高校とは言いませんが、多くの高校が、6月23日の慰霊の日に関連させて、この琉球・沖縄史の授業の中で、平和特設授業に関するような内容を展開しています。そこで、また時間が取られます。しかも、これは学校設定科目ですから、学習指導要領のような沖縄県内統一の授業基準とか共通の到達目標などはありませんし、沖縄県教委が先生方を対象にするような研修がやられてるわけでもありません。

その一方で、社会からは、例えば「何で今の高校生は、こんな常識も知らないんだ」とか、ある種の考え方があって、この考え方から基づくと「何で今の高校生は、沖縄の歴史のことを考えないんだ」という要請が強い中で、どうしても先生方は、先ほどご紹介した新城先生を中心とするグループが作られているこのテキストブックを、とんとんと進めていって何とか通史を終わらせる、というようなところで汲々とされているような状況です。

つまり、琉球・沖縄史の授業においても知識を重視する傾向は変わらず、しかも社会からの要請の中で、「沖縄の自己認識」というものを、高校生に育成しなきゃいけない」とは言われつつも、統一基準がない中で担当する先生に全部丸投げになっている。しかも、その担当の先生は必ずしも琉球・沖縄史を専門に学んでいるわけでもない。もちろん、個々の先生方は努力されて、非常に優れた授業をやられてる方がいるのは、その通りなのですが、それが全体に共有されてるわけではないということです。

そのような中で、わが大学の経済学部は、入試問題の選択科目に琉球・沖縄史というのを、今度、来年の入試から入れるというのを決めまして、学内で相当もめたんですが、入れてしまいました。そのことに対して、県内の新聞が社説で、「冲国大入試に琉球史」ということで取り上げて、その最後で、このように書いているんです。「琉球沖縄史を学ぶ際は、史実に基づきながら、沖縄の人々の立場に立って当時を想像することだ」と。「そうすると、それまでのイメージと異なる沖縄像が浮かぶに違いない。このような機会は、『しまくとぅば』とともに、沖縄のア

イデンティティや自己決定権の確立に重要な要素となる。日本復帰後、沖縄の基本構想などで、永らく沖縄の自立が目指されてきたが、歴史を知らずに真の自立はあり得ない。沖縄の人々が自らの歴史を知り共有することが、分断を乗り越える礎にもなる」と社説で述べています。

私は、とても残念だなと思います。決して、沖縄の子供たち・生徒たちに、琉球沖縄の歴史を学ばせるな、とは言いません。これは、とても必要なことだと思います。しかし、その学ばせ方が、知識一辺倒であるとか、沖縄だけの歴史を沖縄だけの観点でしか教えないということで、果たしていいのか、ということに私は大きな疑問を感じています。

更に、本学が先鞭を切ってしまったので何とも言い難いところがあるのですが、「入試にあるから、それを学ばせる機会が広がるのだ」というようなことが肯定されるということは、かつての世界史未履修と同じような問題を生み出しかねない。逆に言うと、「受けないから勉強しなくて良いのだ」という論理にもなりかねません。「沖縄の人々」「沖縄の人々の立場」だけを強調すると、これは、これまで何度か出てきますが、国民史、ナショナルヒストリーの問題と軌を一にするような構図が生み出されてしまうと思います。

そこで、最後に「周辺の歴史」です。こうした沖縄の歴史の根底にあるものは、沖縄学の問題に行き着くのではないかと考えています。ご承知の通り、1920年代伊波普猷が日琉同祖論というものを述べたことから沖縄学が広がっていくわけですが、沖縄や沖縄の人々のアイデンティティというものを考える学問として発展していきました。

伊波普猷は、「日本と沖縄は根源的に一体であるのだけれども、沖縄は根っこは一緒なんだけれども、表に見える部分について、かなり個性を有する地域なんだ」ということを主張されています。

このことが、それを受け取った人々の中で、「日本と根源的に一体なんだ」というところだけにスポットを当てて、そこを強調する人、日本の中の沖縄という、沖縄県の沖縄を重視する意見と、「沖縄の個性」というところを重視して、アジアにおける琉球という考え方、沖縄と琉球という、この対立を生み出していきました。これは、今日に至るまで様々な政治的状況と結びついて、日本との一体性を強調する論理や、沖縄の自立というような文脈の中で、都合よく使われ続けてきているというところがあると思います。

『帝国意識の解剖学』の本の中で、平田先生が、帝国意識の図式化を、表に載せられています。「支配されてる地域にやってきた支配層→移住者支配層→大衆」。こういう矢印に従って、

帝国意識っていうのは浸透していくのだということを説明されているのですが、沖縄においては、伊波普猷の沖縄学以来、沖縄の大衆の中から「自分たちは何者であるのか」という考え方が非常に深く論じられるようになった結果として、この地域の中から、ある種ヤマトからやってきた人たちや、ヤマトそのものに対して対抗するために、「沖縄というのは、こういう地域なんだ、こういう文化的な特性、特殊な歴史を持っている地域なんだ」という論理的な、学問的な展開が広がっていったというのが、一つの特徴だと思います。この結果、「本土とは違う特殊な歴史を沖縄は抱えていて、それこそが沖縄にとっての固有な価値なんだ」というような考え方が、多くの人に受け入れられている。

これは、別に一般化された言葉ではなく、今回私が報告に際して使ってる言葉ですが、琉球・沖縄史は日本の歴史とは違う特殊な歴史であるという考え方があって、「特殊だからこそ、ちゃんと学ばなければいけない。沖縄の歴史だけ、ちゃんと沖縄の子供たちに学ばせなきゃいけない」という論理につながっていくのだと思います。こういう論理だと、例えば「沖縄の人たちにとって大事な歴史である」という位置付けであるならば、例えば、東京の子供たち、北海道の子供たちは、別に関係のない歴史になってしまいますので、学ぶ必要性は全くなくなってしまうということになる。「果たして、それでいいのだろうか」というところに大きな疑問を感じています。

酒井直樹先生は『ナショナル・ヒストリーを学び捨てる』という本の中で、このように書いているわけです。「国民の歴史」「国民史」といっぱい書いているわけですが、今、沖縄で起きている現状というのは、この「国民」という言葉が、沖縄の人、沖縄では、これを「うちなんちゅ」と言うわけですけど、「うちなんちゅ」という言葉に変わっただけで、同じような構造になってしまっているように、私は思えてなりません。

それが、先ほどのような課題を抱えている、学校開設科目で展開されている琉球・沖縄関係の歴史の授業の中で、無批判に、それがずっと提供され続ける。それを無批判に子供たちが受け止めてしまうということになると、これは、ちょっと怖いなと。いろんな意味で危険性をはらんでいるのではないかと思います。

先ほども申し上げましたが、沖縄には多様な地域との関係の中で歴史を育んできたという実態があります。決して沖縄が単独で歴史を育んできたわけではありません。だから、関係性の中で、「この時代、なぜ、この地域と、こういう関係を結ばざるを得なかったのか」ということの中で沖縄を位置づける。「沖縄は、こうだった」という歴史ではなく、「沖縄は、こういう地域と、こういう歴史を紡いできた」という考え方を、ぜひ琉球・沖

縄史の授業の中でやっていく。そういう方法を子供たちに、ただ単に事実だけを伝えるのではなくて、方法を身につけさせたいと個人的には思います。そのことは、先ほどからいろいろところで論じられていますが、特定の地域の、もしくは特定の出来事を、多様な主体、多様な価値観の中から考察する視点を子供たちに育成することにつながるのではないかと考えております。

最後に、沖縄県内の教員養成では、通史の授業が、わずかな科目数でしか展開されていない、それが課題です。それを乗り越えるために、これから、どういうことをやっていくかということを検討しなければいけないのですが、沖縄の子供たちは、とても純粋に自分の地域が大好きなんです。なぜかはよくわからないのですが、本当に好きなんです、沖縄のことが。離れたくないのです。でも、「では、なぜ好きなの」と言ったときに、わからないのです。盲目的に大好きなんです。だけど、その盲目的な大好きというのは、ともすると沖縄中心主義になりかねない。「うちなびけ」と言うんですが、そうなりかねないので、沖縄という地域を相対化して「他の地域と見たときに、こういうところがあるから、やっぱり、この地域がいいな。この地域には、こういう課題があるな。だから、私は、こうやって生きていこう」というような学びにつなげていくことが、これからの高校における歴史教育や、琉球・沖縄史教育の課題になっていくのではないかと思います。

(編註：2日目のパネルディスカッションについては、報告要旨集より編集して転載します)

パネルディスカッション②-1 「歴史総合」「探究科目」の実際の実施に向けて」～ワークショップ「植民地の記憶をどう授業に活用するか——北海道の事例から」

報告1

満州国の記憶を教室での授業に活用する

北海道有朋高等学校 吉 嶺 茂 樹

1. 公立通信制高校という場所
2. なぜ、「高齢の女子高生」が本校にはたくさんいるのか→「植民地の記憶①」
3. いくつかの、ケーススタディー
4. 進学校で「戦争の記憶」をさかのぼる実践は可能か? 「植民地の記憶②」
—学校史を活用する・卒業生を「活用」する—
5. 「時間はどう生み出すんですか」「評価はどうするんですかあ?」
6. 最後に
→「令和3年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針」より

市立札幌大通高校の実践から

市立札幌大通高等学校 信 田 麻紀子

1 大通高校について

① 学校沿革

平成20年4月 開校 定時制・単位制・普通科の高等学校(午前部・午後部・夜間部の三部制)

市立高校改革の下、多様な生徒の受け入れを目的に設置

平成21年 ユネスコスクール認定(北海道の高校では1校目、平成26年には世界大会参加)

平成22年 札幌市生涯学習センターの講座を本校で実施し、社会人と共に学ぶ「学社融合」開始

「国際クラス」「遊語部」「多文化交流会議」誕生(文部科学省の支援事業を受け前年から準備)

平成24年 地域連携・教科横断型学習「ミツバチプロジェクト」開始(屋上で都市型養蜂)

(30年全国ハニーオブザイヤー国産部門最優秀賞、来場者特別賞受賞)

平成28年 学校、福祉系就労コーディネーター、企業3社で「多段包摂連携」開始

学校外の地域資源(ヒト・モノ・コト)を活用した探究的な学習「キャリア探究」開始

平成30年 生徒の居場所のための校内カフェ「ドーリ・プレイス」始動

② 渡日帰国生徒の存在

・渡日帰国生徒…外国にルーツのある生徒、日本に渡ってきた、戻ってきた生徒の総称。20～30名程。

日本語支援を必要としている生徒も

・札幌市は外国人の非集住地域…出身国やルーツが多様、中国、ロシア、フィリピンなどの生徒が数名

インドネシア、ニュージーランド、コスタリカ、アメリカ、エジプト

ハンガリー、ボリビア、ウクライナなど11カ国程

・「海外帰国生徒等枠」…2月の自己推薦入学者選抜、9月の一般入学者選抜の募集枠内に若干名

英語や母語による作文提出と面接時に通訳を介することを認めている

・課題…日本語、教科学習、卒業後の進路、日本での生活への適応等多岐にわたる

入試で日本語能力を問わない→日本語レベルまちまち(ゼロから日本語能力試験JLPTのN2)

中間言語が存在しない場合→まさに手探り

大学入試の外国人入試枠ではほぼ受験不可。専門学校は卒業後にビザが出る職種かどうか。

2 渡日帰国生徒支援体制とニーズに応じた指導について

・国際クラス担任、日本語コーディネーター、保健支援部担当者、多文化交流会議が支援、調整

① 日本語…学校設定科目

・レベルチェックテストを入学確定後に実施。本校教員と時間講師(日本語の文法対応)で授業。

・週10時間。レベルは初中級まで。現在3レベルに分けて展開。授業以外にボランティアの協力(札幌こども日本語クラブ)。札幌市教育委員会「札幌市帰国・外国人児童生徒教育支援事業」、厚生労働省「中国残留邦人等2世・3世のための日本語学習支援事業」、大通高校支援事業などを活用。

②教科学習

- ・ 考査などでの合理的配慮(ルビ付きのプリント、辞書の使用、補習など)
- ・ 生活言語は1年ほどで身につくが、学習言語習得には5、6年 → 渡日帰国生徒のための科目設置特別講座…用語や文章が難解で苦手とする生徒が多いため、「国語総合I」と地歴公民3科目
- ・ 「世界史A」「地理A」「現代社会」

テキストにルビ。単語を調べながら日本語の意味を確認しつつ学習(JSLカリキュラムの応用)

地歴の授業後半には、各国の歴史、人物や災害、観光などテーマを決め、プレゼン資料を作成し、クラス内での発表を経て、学校行事であるプレゼンテーション大会で発表。日本語で評価し、励まし合う。

効果 日本語と教科を同時に学習。自分に関係ある事を学び伝える。日本人には異文化理解の大事な場。

※ 母語のロシア語、中国語の授業と協同で「世界史A」の教科書の翻訳版を使ったことも。

③居場所作り・アイデンティティの保障

- ・ 日本語を間違えても大丈夫な場所。コミュニケーションが苦手という日本人生徒も交流できる場。

→「国際クラス」「遊語部」

国際クラス…日本語能力に課題のある生徒は、原則1年次の間は「国際クラス」に所属

遊語部…渡日帰国生徒と日本人生徒をつなげる場。文化紹介や国際協力活動を通して、渡日帰国生徒の日本語力・自己肯定感の向上、日本人生徒の国際的視野を広げることを目的として活動。

2013年からフェアトレード商品販売活動を開始し、売上金の一部を北海道ユニセフ協会に寄付。海外からの訪問団受入時には、渡日帰国生徒を企画、運営のメインスタッフとし、母語を活かして通訳を担当させ、学校紹介をすることで日本語実践の場に。

昨年からはフェアトレード商品やゲームを開発し、今年は販売も。

- ・ 文化が社会的に尊重されることは、生徒の自己肯定感や自尊感情にも深く関わる。

→「遊語部」「母語授業(授業外での学習)」

母語保障…母語は、第2言語習得や論理的思考の発達といった側面で非常に重要。それ以上に自分のルーツを象徴するアイデンティティ形成において重要。中国語、韓国語、ロシア語、タガログ語、モンゴル語、クメール語、スペイン語、英語、タイ語、ウイグル語など、研究者や大学院生を指導者に迎え、週1回1時間、時事問題や歴史、文学などをテーマに授業。母語で悩みを話せ、母語を用いて学び、忘れかけ始めた母語そのものを学ぶことを通して自己肯定感を取り戻すなど、言語習得、認知発達、アイデンティティ、進路形成など様々な面で支援となると考えている。

3 まとめ

居場所や支援体制が整い、なじめない等の理由で退学する生徒は減った。出身国やルーツが違っていても日本語を学び、部活動と一緒に活動する仲間として励まし合い、母語が多様なために共通言語として日本語を日常的に使用するという効果も現れている。日本人生徒にとっても、「一緒に学び活動する」「日本語を教えて中国語を教えてもらう」など同じ学校に通う仲間となった。言語や文化の多様性を育み、多様性に学ぶという風土の醸成は、他の困りを抱える生徒にとっても生活のしやすい場なのではないだろうか。一人一人が抱える様々な課題についても、関係者や相談機関等とも連携を図り、取り組んでいく必要があると考える。

函館中華会館と樺太華僑

函館ラ・サール中学・高等学校 小川正樹

日本列島の北端に位置する北海道と樺太の間では、日本とロシアの間で国境線が何度か変化した。北海道が日本領として開発されるのは開拓使の設置からであり、「内国植民地」として発展してきた。樺太は日露雑居からロシア領を経てポーツマス条約により日本領となり、樺太庁が設置されて「移住型植民地」として開発が進められた。両地域ともに、住民構成は他の日本の植民地とは異なり、住民のほとんどは移住した日本人で、「植民地」というよりはむしろ「内地」としての性格を強めていった。

北海道の箱館（函館）は安政の五か国条約以降、海外に開かれた貿易港となり、外国人居留地が設置されて各国の領事館も開設された。ロシア人・アメリカ人・イギリス人・フランス人とともに中国人（華僑）も来航し、のちに華僑海産商は北海道の海産物貿易を独占し、日本人海産商を圧倒した。外国人居留地の外国人は、いわゆる不平等条約で特権が認められていた一方で、遊歩区域の規定により日本国内での活動を制限されていた。条約改正により外国人居留地が撤廃されるまで外国人は日本国内で不自由を強いられていた。さらに、日本国内が外国人に開放された後も、日本政府は勅令 352 号と内務省令 42 号を制定し、外国人の労働移民を事実上制限した。この制限の中でも日本国内での活動を認められたのが呉服行商などの華僑の行商であり、外国人居留地から北海道全域、さらに樺太にも移動し、各地に定住して小規模な華僑社会を形成した。

日本に来航した華僑の職業は、長崎や神戸、横浜などでは一般的に「三刀業」と呼ばれる料理・仕立・散髪に従事する職種が中心であったが、「植民地」としての性格を持つ北海道と樺太では状況が異なっていた。北海道では当初、海産商がその中心であったが、後には呉服行商が中心となり、樺太では農業・漁業・鉱業に従事する単純労働者が中心であるなど、国内他地域の華僑社会とは傾向が異なっていた。

北海道と樺太の華僑の結びつきはいくつかの事例で確認できる。函館中華会館の建設や用地取得に対する資金協力のほか、日中戦争下における華僑団体の結成においても密接なつながりを持っていた。こうしたつながりは日本の敗戦により大きな影響を受ける。樺太では華僑社会だけではなく日本人社会も消滅し、北海道でも留学生が中心となって新たな華僑の団体を結成し、従来からの華僑団体は各地で孤立していくことになる。

北海道と樺太の華僑は居留地制度や条約改正の影響を受けながらも、着実に定住を進め、独自の社会を形成する一方で、日本とロシアの国境線変更の影響も受けていった。彼らは日本人移民によって建設された地域社会の中に、外国からの移民として進出し、地域社会の一員として定住していった。

本報告では、主に北海道と樺太の華僑社会を対象として、不平等条約体制下における移民社会の形成、条約改正から大日本帝国崩壊までの移民社会の変容について、その概要を明らかにしていきたい。

報告1

学習指導要領改訂等の新たな教育課題に対応した教員の養成・採用・研修の一体的改革の推進に向けて

北海道教育庁 赤間 幸人

<要旨>

教員養成については、文部科学省をはじめ、大学や教育委員会において、教員の資質能力向上に向けた取組が進められているが、本報告は、養成・採用・研修のうち養成に焦点を絞り、学習指導要領改訂等の新たな教育課題に対応して求められる取組について、情報を共有するとともに、高等学校地理歴史科の歴史系科目の教員養成において、どのような指導力を養成することが求められているのか、論点を提起することを主眼とするものである。

I 教員養成に関する法令改正及び教職課程の認定（文部科学省総合教育政策局作成資料より）

1 教員養成に関する課題

- 必要単位数が法律に規定されており、新たな教育課題が生じても速やかな単位数の変更が困難
- 学校現場の状況の変化や教育を巡る環境の変化に対応した教職課程になっていない
- 大学教員の研究的関心に偏った授業が展開される傾向があり、教員として必要な学修が行われていない

2 2015年12月 中教審答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」

- 教職課程の科目区分の大括り化
- 新たな教育課題に対応するための履修内容の充実
- 教職課程コアカリキュラムの作成
- 教員育成協議会の創設、教員育成指標の策定

3 2016年11月 教育職員免許法の改正（→2019年4月1日施行）

- 教科の専門的内容と指導法を一体的に学ぶことを可能とする「教科及び教職に関する科目」に大括り化

4 2017年11月 教育職員免許法施行規則の改正（→2019年4月1日施行）

○学校現場で必要とされる知識や技能を養成課程で獲得できるよう、教職課程の内容を充実
教職課程に新たに加えた内容の例…アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善、ICTを用いた指導法、特別支援教育の充実 等

5 H29.11 教職課程コアカリキュラム

- 全国大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力を明確化
- 大学（養成）、教育委員会等（採用・研修）、文部科学省（行政）等の関係者が活用することにより全国的な教員の資質能力の水準向上

6 H30年度 全大学の教職課程の審査・認定

- 改正法令及びコアカリキュラムを反映した教員養成の体制が確保されていることを、教職課程を置く全ての大学について審査（→2019年4月1日から、履修内容を充実させた教育課程の開始）

II 学習指導要領改訂等の新たな教育課題に対応して求められる指導力（歴史系科目）

- 育成を目指す資質・能力（知識及び技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学びに向かう力・人間性等の涵養）を偏りなく実現するため、アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善（生徒の深い理解を伴う学習過程の理解や教科の指導法の充実）を進める指導力
- 「歴史総合」「世界史探究」「日本史探究」の「目標」の「思考力・判断力・表現力等」に示された（共通部分を抜粋）「歴史の展開に関わる事象の意味や意義、伝統と文化の特色などを、時期や年代、推移、比較、相互の関連や現在とのつながりなどに着目して、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、歴史に見られる課題を把握し解決を視野に入れて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力」を養う指導力。
- 各科目の「内容」の項目（単元）毎に示されている、「知識」と「思考力・判断力・表現力等」を関連付けて一体的に学習を展開させる指導力

大学における「歴史総合」実践の成果と課題—琉球大学での取り組みを中心に—

琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 池上大祐

本報告は、琉球大学国際地域創造学部において、2018年度後学期に開講した「歴史総合」に関する講義実践報告である。2018年4月からの学部改組に伴うカリキュラム改変で、かつての「西洋史概論Ⅱ」を廃止し、「歴史総合」へ切り替えた背景としては、以下の2点があげられる。すなわち、教員ポスト削減という過酷な状況に対応するために、従来の「日本史」「東洋史」「西洋史」の三区区分から、「日本史」「世界史（西洋史分野、東洋史分野）」の二区分（およびその連携強化）へと変更せざるを得なかったという大学内の事情と、2022年度から適用される新学習指導要領に対応できる教員を養成する必要があることから、早めに学生たちに「歴史総合」という科目を認識してもらう必要があるという歴史教育環境の変化の2点である。

「歴史総合」の内容構成の特徴としては、(1) 沖縄の島嶼性を意識しながら、太平洋地域を舞台とした近世以降の歴史を通覧すること、(2) 従来の「西洋史概論Ⅱ」で直接扱いきれなかった事象を積極的に導入すること、(3) グループ討論の導入の3点あげられる。(1)については、第1章「太平洋の『発見』・『探検』—15～18世紀」、第2章「太平洋の『分割』—18世紀末～20世紀初頭」、第3章「太平洋の『破壊』—20世紀後半」の三章構成のもと、いわゆる「大航海時代」、啓蒙主義、帝国主義、2つの大戦、冷戦と核実験を大きなテーマと関連させながら、太平洋地域と世界各国とのかかわりについて網羅的に整理した。(2)については、従来「西洋史概論Ⅱ」で触れていた事象（宗教改革、三十年戦争、環大西洋革命、1848年革命など）を思い切って割愛し、その分、「西洋史概論Ⅱ」で扱えなかった事象（明朝＝海禁政策、フィリピン独立運動、日本統治下南洋群島、沖縄の核配備、南太平洋非核地帯条約など）を取り入れた。③グループ討論については、「歴史学の考え方」、「文明」と「野蛮」の考え方、「空爆の考え方」、「先進国—発展途上国、中心—周辺の違い」をテーマにして、計4回導入した。

受講学生（約70名）の反応については、期末レポートの成果と講義感想文から分析した。世界史・日本史リブレット（人物史含む）を一冊自由に選択し、その要約も含めることをレポートの要件とした結果、近世・近代においては世界史リブレットを選択する学生がやや多かったものの、特に20世紀史に関しては、「日本史」「世界史」という区分を越えて、関心あるテーマを自由に選んでいたようである。講義感想文においても、特に二つの世界大戦以降になると「日本史」「世界史」の区分の意味が希薄化していくことを学生自身も認識していたことが読み取れた。

反省点として、(1) 太平洋地域を「舞台」としたままで終わらせてしまい、太平洋島嶼地域に生きた人びとについて深く触れることができなかったこと、(2) 何をもって「歴史総合」を理解したことになるのかが、今回の期末レポート評価では不明瞭であったことが挙げられる。特定の地域圏を定点観測地として従来の日本史・東洋史・西洋史をつなぐ、という方法自体は有効と思われるが、それをあえて「歴史総合」と称する意義については、上記の反省点を克服するとともに、より一層、高大連携を意識した深い考察・分析が必要となる。

世界の大学の歴史教育の比較研究から

大阪大学 桃木至朗・猪原達生

(要旨)

この報告は、大阪大学で実施中の日本学術振興会『課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業』（グローバル展開プログラム）「国民国家型の大学歴史教育をグローバル化時代に適応させる方法に関する国際比較」（<http://history-education.labos.ac/ja> 代表：堤一昭、2017年2月～2019年9月）の取組内容について紹介するものである。

同プログラムは、日本の大学での歴史教育が通常、自国史はもちろん外国史ですら自国民専用の内容・形態をもち、成果発信や教育も多くが自国語でしかおこなわれない点（それは教員養成や教科書執筆などを通じて、初中等教育にも明らかに影響している）を改革するために、諸外国の大学歴史教育の比較研究を行うとともに、教育内容・形式の改善を図ることを目的としている。分担者には大阪大学の文学研究科と言語文化研究科（外国語学部）の教員以外に、これまでも歴史教育やグローバルヒストリー研究の取組で協力してきた地方大学、国際系の大学などの教員も名を連ねている。

海外の教育事情の調査・紹介というと通常は欧米諸国に偏っているが、この計画では、中国・韓国・ベトナム・シンガポールなど東アジア・東南アジア諸国を重視し、ヨーロッパではギリシア・スウェーデンなど「周辺部」に位置する諸国の調査もおこなった。いずれもアジア世界史学会（AAWH）ほか、従来の協力関係を活用し、これまでに大阪大学での2回の国際ワークショップ、AAWH第5回大会（2019年1月、大阪）でのパネルなどを開催したほか、ベトナム（ハノイ国家大学）、米国（カリフォルニア州立大フラトン校、UCLA）、中国（華東師範大学、北京大学、北京外国語大学、武漢大学）などの訪問調査を実施した。調査内容は入試、教養教育と専門教育・大学院教育、教員養成、卒業生の進路、教育・研究への外国語の使用状況など多岐にわたり、訪問した大学の多くでは授業見学もおこなった。この8月5～6日には大阪大学中之島センターで最終シンポジウムを開催し、米独中韓越、シンガポールなどの協力者も招待して、(A-1)東アジア諸国、(A-2)シンガポールとヨーロッパ諸国、(B-1)グローバルヒストリーなど研究分野ごと、(B-2)地方大学・国際系大学など機関ごと、(C)新しいメディアやツールといったさまざまな角度から、現状と課題を討議する予定である。

授業改革では、教育内容と使用言語などの面で、従来の高大連携やグローバルヒストリー研究、外国研究（地域研究）の成果を利用しながら、少しずつ刷新を進めている。教養科目「市民のための世界史」や専門過程の概論「歴史学方法論講義」（教職科目にも指定）では、歴史総合など高校の新課程への対応を念頭に置きながら、世界史と日本史の内容上の関連づけ・統合の高度化を試みつつある。また言語面では、「グローバル・ジャパン・スタディーズ」など他のプログラムとも連携しながら、日本史やアジア史の教員でも最低限の英語での授業ができるようにする、外国史では英語以外の言語も必要に応じて使用するなどの目標を立て、前者ではポスドク研究員など若手を中心に、ハノイ国家大およびフラトン校での模擬授業や、立命館大学でのゲストスピーカーなどのかたちで授業を試行したことが特筆される。後者については、阪大外国語学部教員の協力もえながら、非英語圏の国・地域に関する演習などで、日本語・英語と「現地語」の資料を織り交ぜる、討議の一部も三言語で行うといった実験を行いつつある。

変わる高校歴史教育と大学入学者選抜

名古屋外国語大学 鈴木 茂

新学習指導要領によって、高校の歴史教育が暗記型から思考力型へ移行することが明確に打ち出されたことを受け、その改革を高校の定期試験や大学入学者選抜にどのように反映させるのか、また大学の教養教育とどのように接続するのか、という問題は今後の高校・大学でどのように歴史を教えていくのかということと密接に関係する。

その際に私たちが考えておくべき事は、単なる「大学入試」という文言が示すような、いわゆる「解答テクニック」に問題を矮小化することなく、この問題が「そもそも、問われるべき『歴史』学の内容と枠組みはどう変わりつつあるのか」ということである。この点で、本パネルでは、「歴史教育の高大接続」という観点から、思考力重視の歴史教育における成績評価方法や、高校における歴史教育の成果を大学入学者選抜にどのように生かすのか、さらに、大学入試における歴史問題がどのように今後変化していくべきなのか、といったことを議論したいと考えている。

新センター試験を見据えて—試行調査(プレテスト)の分析—(日本史)

関西大学中・高等部 宮崎 亮 太

1. 試行テスト(日本史)の概要

- ・大学共通テストと試行調査(プレテスト)[以下、試行調査と記す]の位置付け

→2020年度の大学共通テストに向けて、2017年度から試行調査を実施。

「大学教育の改善に向けて」「高校教育の改善に向けて」「大学入学者の選抜に向けて」

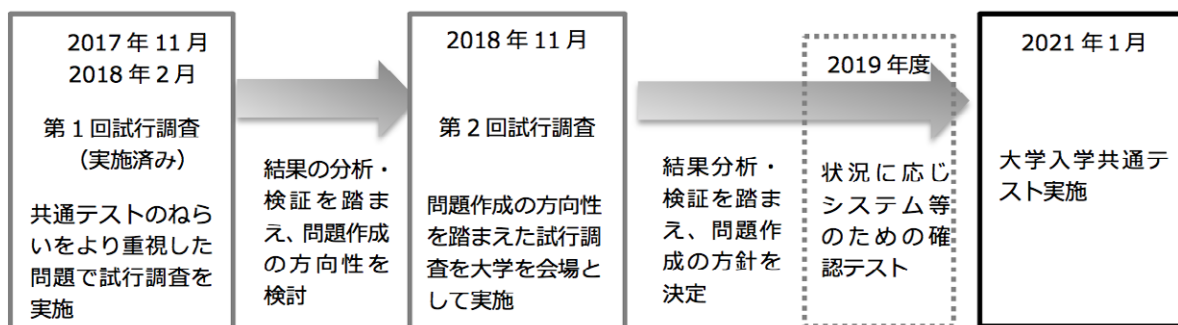
- ・探究等の過程を重視した問題—歴史に関わる事象を多面的・多角的に考察する過程を重視した問題

→用語に関する知識ではなく、事象の意味や意義、特色や相互の関連等に関する理解が必要な問題

資料から得られる情報と学んだ知識を活用しながら、仮説を立てたり、考察したりすることが必要な問題

時代や地域によらず「歴史の見方」のようなテーマを扱った問題

時間軸を長く取った時代を貫く問題 など



独立行政法人大学入試センター 平成29年に実施する大学共通テスト導入に向けた試行調査の趣旨について より

<過去の大学入試センター試験(参考)>

- ・2019年度大学入試センター試験(日本史B)の概要

大問数: 6 解答数: 36

大問別内容: 第1問「地名からみる歴史・文化」(16点) 第2問「原始・古代の歴史研究と資料」(16点)

第3問「中世の政治と社会」(16点) 第4問「近世の社会・政治・文化」(16点)

第5問「近世・近代における公家と華族」(12点) 第6問「近現代の日米関係」(24点)

- ・過去5年間のセンター試験日本史Bの平均点

年度	2018	2017	2016	2015	2014
平均点	62.19	59.29	65.55	62.01	66.32

参照：Benesse 駿台 データネット 2019 <https://dn-sundai.benesse.ne.jp>

<2018 年度試行調査（日本史）結果>

日本史 B	満点	最高点	最低点
	100	100	8
	平均点	標準偏差	受検者数
	54.57	13.40	4,200

人数（割合）	
1段階	147 (3.50%)
2段階	220 (5.24%)
3段階	390 (9.29%)
4段階	923 (21.98%)
5段階	750 (17.86%)
6段階	805 (19.17%)
7段階	456 (10.86%)
8段階	330 (7.86%)
9段階	179 (4.26%)

点数	段階
0	1段階
2	
4	
6	
8	
10	
12	
14	
16	
18	
20	
22	
24	
26	
28	
30	
32	
34	2段階
36	
38	
40	3段階
42	
44	
46	4段階
48	
50	
52	
54	5段階
56	
58	
60	6段階
62	
64	
66	
68	7段階
70	
72	
74	8段階
76	
78	
80	
82	
84	
86	
88	
90	9段階
92	
94	
96	
98	
100	

日本史 B

平均正答率区間	（設問数）	設問番号	（部分正答等）
95%≧	(2)	1, 4	
90%~95%	(1)	13	
85%~90%	(1)	5	
80%~85%	(2)	2, 15	
75%~80%	(2)	21, (35,36)*	
70%~75%	(1)	25	
65%~70%	(0)		
60%~65%	(2)	3, 22	
55%~60%	(2)	16, 32	
50%~55%	(1)	12	
45%~50%	(7)	8, 14, 23, 24, 26, 33, 34	
40%~45%	(1)	20	(35,36)[1,5]
35%~40%	(6)	6, 7, 17, 19, (27-28)[34]*, 30	(27-28)[3]
30%~35%	(1)	18	(35,36)[2,7]
25%~30%	(1)	29	
20%~25%	(1)	31	(27-28)[4]
15%~20%	(1)	9	
10%~15%	(0)		
5%~10%	(1)	(10-11)	
<5%	(0)		

参照：大学入学共通テストの導入に向けた試行調査（プレテスト）（2018 年度実施）の結果報告 2019 年 4 月

2. 高校で何を学び、何ができるようになるようになるべきか

- ・大学共通テストには、高校などにおける「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けたメッセージ性が含まれている→では、生徒とともに何を学び、何ができるようになるべきか？

(1) 時代・時期を区切って歴史歴事象の推移や変遷、影響、因果関係を考えて理解する

現行のセンター試験では、選択肢に用語が散りばめられており、用語で判断できる問題が多い。一方で試行調査では、必ずしも用語を使うとは限らずに選択肢の文章が作成され、推移や変遷を問う問題が出題されている。2018年度試行調査第1問（資料参照）にあるように、「原始・古代・中世・近世・近代・現代」や時代ごとに生徒とともに大観して考察することが必要である。

その際に、ある時代・時期がどのような時代・時期であったのかを考察するために、用語を教えるのではなく、基本となる概念を導き出すような授業が求められていると感じる。

(2) 資料を何のために活用するのかを考えて理解する

試行調査では初見の資料から得られる情報と授業で学んだ知識を組み合わせる問題を出題すると明言されている。しかし、初見の資料を活用するのは現行のセンター試験でも同じことである。試行調査では複数の資料を使って1つの問いを考えさせている。

2018年度試行調査第2問―問4（資料参照）には「古代の関所の成立から衰退まで」というテーマがあり、それに合わせて資料が用意されている。つまり、授業では何を問うのか、何を考えさせるのかを明確にして、それに合わせて資料を提示する必要がある。もう少し踏み込むと、問いがあり、仮説を立てて、仮説を論証するためにはどのような資料が必要かを考える探究的な学習のプロセスを授業に取り入れる必要があるだろう。

(3) 何が問われているかを理解する

現行のセンター試験とは違い、試行調査はリード文がほとんど無い。その代わりにテーマ設定が細かく記されている。そのテーマ設定を理解していないと問いに答えることが難しいことも多い。これは設問の要求を読み取るというテクニカルな課題だけではなく、多くの課題を授業者、学習者に突きつけている。

生徒に歴史事象の背景や歴史事象の影響などを考察させる際に、膨大な知識を一方向的に与えるのではなく、前提となる条件をうまくまとめて、提示することを必要としている。テーマ設定の上に、明確な問いがあり、考察する条件が提示され、生徒が考察してまとめるという授業スタイルの要請が浮かんでくる。

(4) 歴史の見方は複数あることを理解する

試行調査にあらわれた新しい傾向として、正答が複数ある問いや選択肢が正文のみで構成され、評価と根拠を選ばせる問いなどがあげられる。2017 年度試行調査第 5 問一問 2・3 や 2018 年度試行調査第 6 問一問 7 (資料参照) などにみられるように、「A という見方もできるが B という見方もできる」ことを生徒が理解する必要がある。試行調査では、考察した結果が選択肢となっていることが多い。授業では「一般的には A と言われているが、実は…」と嬉々として授業者が話すこともあるが、本来は結果に至るまでの思考の過程を示しながら、生徒とともに考察する過程を楽しむ必要がある。教材研究のプロセスを授業にして、生徒とともに体験することが最も重要ではないか。

(5) その他

大学入学共通テスト試行調査 (世界史B) 問題の分析

筑波大学附属高等学校 五十嵐 学

● 試行調査 (2017・18年) の第一印象

見たこともない② 面白い③ 資料がたくさん④ 使われている!

しかし、実際に問題を解いてみると・・・

⇒結局、知識問題では? これまでと何か変わっている? これまでと違う「力」を問えている?

● 試行調査の分析・考察するべき点

① 資料が活用される問題になっているのか?

資料は設問へ向けての導入要素 (これまでのリード文のようなもの) として扱われており、つまり 資料を大して見なくても、知識があるかないかが解答を左右する

⇒これまでの知識問題と本質的には変わっていない

② 資料が初見であることが活かされる問題になっているか?

初見であることの意義は何か

=既に持っている知識・理解が初見の資料と結びつけ (複数の知識を動員する、持っている知識を具体化・イメージ化する、現状の理解から新しい理解へと変容させる) られる際の発見

しかし試行調査では、問題文で資料についての解説がなされ (=既習の知識・理解へのブリッジがしかれる)、それ以降は、これまでの知識問題のようにになっている

⇒資料についての解説 (知識へのブリッジの部分)、本来はここが問いとされるべきではないか!?

③ 資料の面白い点が問いになっているか?

面白さとは何か

=既習の知識が資料によって具体化される

「ああこういうことだったのか! 実際にこういうことが起こっていたのか!」

=具体化されることで、既習の知識・理解が微修正される

「ああ本当はこういうことになっていたのか! よく分からなかったけど、つまりこうなっていたのね!」

=現在の我々の感覚とは異なったものが提示されている

「昔の人はこういう風に考えていたんだね! なんで今と違うんだろう?」

しかし試行調査では、面白さを受験生に発見させるのではなく、全て問題文において説明してしまっている

⇒こうした資料を導入に使うことによって、従来の試験よりも歴史学習の面白さを伝えることができている?

⇔ 一方で、その面白さと関係なく、設問に正解することができる

面白さを、設問自体が否定している (蔑ろにしている) ことにならないか?

「面白さに共感しなかったって、点数はとれる、資料を見なくても点数はとれるじゃん!」

●資料を読むことと知識の関係

1. 資料（史料）⇒過去の事実が確定 ⇒歴史という科目における知識となる
2. 歴史という科目における知識を習得する
⇒新たな資料（史料）に出会う ⇒既に持っていた知識・理解・認識が新たな結びつきを持ち、新たな知識・理解・認識が生まれる、既に持っていた知識・理解・認識の深化や変容が迫られる

☆受験生は歴史科目における知識を既に持っているので、入試問題では2. の段階が想定される
つまり、資料と知識を合わせた問題としては、 部分ができるのか否かを問うことが必要

●試行調査（2018年）改題の試み

例1 第3問B

B 次の貨幣X～Zは、ロンドンの大英博物館に収蔵されている、南アジアの金貨である。なお、貨幣の写真は左が表側、右が裏側である。


貨幣Y



表側にはこの貨幣を発行した王朝の君主が描かれ、裏側にはブツダを意味する語がギリシア文字で刻まれている。この王朝の西に位置したバルティアも、初期には貨幣の銘文にギリシア文字を採用していた。だが、これらの地域ではギリシア文化の影響は次第に小さくなり、バルティアを滅ぼした国家では、など、イラン地方の伝統に回帰した。

改題

次の貨幣は、ロンドンの大英博物館に収蔵されている、南アジアの金貨である。



花子さんは、この貨幣に文字が刻まれていることに気づき、これが何の文字であるのかに興味をもった。本やインターネットで、世界の様々な文字について調べてみたところ、次の文字と一致することが分かった。

Α Β Γ Δ Ε Ζ Η Θ . . .

問 南アジアでこの貨幣が使われていたことと関連の深い事柄を、次のア～エから1つ選び、記号で答えなさい。

ア. アラム人がユーラシア大陸の内陸交易に従事していた。
イ. ササン朝ペルシアがゾロアスター教を国教とした。
ウ. アレクサンドロス大王が遠征を行った。
エ. モンゴル高原出身のトルコ民族が西方へと移動した。

第 51 回研究大会のご案内【予定】

日 時 令和 2 年 8 月 7 日 (金) 9:00 ～

会 場 札幌市教育文化会館 研修室 403
(札幌市中央区北 1 条西 13 丁目)

講 師 未定

研究発表 未定 (募集中)

過去の研究大会講演題目	
回 (年)	講演題目・講師
45(H26)	<ul style="list-style-type: none"> ・「アジアに利用されたイギリス帝国—グローバル=ヒストリーの視点から」 大阪大学教授 秋 田 茂 氏 ・「帝国と社会主義の遺産からウクライナ情勢を考える」 北海道大学准教授 長 縄 宣 博 氏 ・「日本学術会議提言『歴史基礎』科目と歴史的思考力育成型の歴史教育とは—韓国の教科書事例から学ぶ」 東京学芸大学名誉教授 君 島 和 彦 氏
46(H27)	<ul style="list-style-type: none"> ・「『歴史と記憶』をめぐる諸問題—資質・能力の育成と歴史学習—」 国立教育政策研究所教育課程研究センター 教育課程調査官 村 瀬 正 幸 氏 ・「『他者』、そして『自己』の理解のために—日本史を世界において考える」 跡見学園女子大学文学部特任教授 三 谷 博 氏
47(H28)	<ul style="list-style-type: none"> ・「アジアの開発とグローバル・エコノミーの展開：GIS を用いて」 東京大学大学院人文社会系研究科教授 水 島 司 氏 ・「これからの世界史教育を展望する」 長野県長野高等学校教頭 小 川 幸 司 氏
48(H29)	<ul style="list-style-type: none"> ・「イスラーム世界と日本——イブラヒムの活動から考える」 東京外国語大学教授 小 松 久 男 氏 ・「実施可能な歴史総合カリキュラムの検討」 東京大学名誉教授 (高大連携歴史教育研究会会長) 油 井 大三郎 氏
49(H30)	<ul style="list-style-type: none"> ・「資本論 150 年：古典派経済学およびマルクスの視座、そして現代経済 (学) の混迷」 名古屋商科大学教授 吉 井 哲 氏 ・「人種関係史から見る現代アメリカ——奴隷解放後に人種隔離社会が、公民権運動後にトランプ政権が出現したのは、なぜか——」 北海学園大学人文学部教授 大 森 一 輝 氏

◆編集後記◆

会報第 26 号をお届け致します。今号は、第 50 回記念大会の内容を取めたものとなり、例年とは異なる形式でお送りします。2 日間にわたって行われた大会は、高大連携歴史教育研究会との共同開催ということで、内容も非常に盛り沢山でした。そのため、講演の質疑応答や、パネルディスカッションのコメント・質疑応答部分は、分量の関係で掲載を見合わせました。充実した議論が行なわれたにもかかわらず大変残念です。次号もまたよろしく願います。(札幌東高等学校・千田周二)